

仮名手本忠臣蔵

大序

鶴が岡兜改めの段

嘉肴ありといへども食せざれば、その味はひを知らずとは、国治まつてよき武士の、忠も武勇も隠るゝに、たとへば星の昼見えず夜は乱れて現はるゝ、例をこゝに仮名書きの、太平の世の政

頃は暦応元年二月下旬、足利將軍尊氏公、新田義貞を討ち亡し、京都に御所を構へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ御威勢
国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造營成就し、御代参として御舎弟足利左兵衛督直義公、鎌倉に下着ありければ
在鎌倉の執事高武蔵守師直、御膝元に人を見下す権柄眼

存じ奉れば、無用との御評議、卒爾なり
と言はせも果てず

「ヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死したる時は大わらは。死骸の側に落ち散つたる兜の数は四十七。それがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと思ふのを奉納したその後で、さうでなければ大きな恥。生若輩な形をしてお尋ねもなき評議、すつこんでおもやれ」

と御前よきまゝ出るまゝに、杭とも思はぬ詞の大槌打ち込まれてせき立つ色目
塩谷引取つて

「コハ、御尤もなる御評議ながら、桃井殿の申さるゝも治まる代の軍法。これ以て捨てられず。双方全き直義公の御賢慮仰ぎ奉る」

と申し上げれば
御機嫌あり

「ホ、さ言はんと思ひし故 所存あつて塩谷が婦妻を召し連れよと言ひ付けし。これへ招け」

御馳走の役人は桃井播磨守が弟若狭助安近
伯州の城主塩谷判官高定

馬場先に幕打廻し、威儀を正して相詰むる
直義仰せ出ださるゝは

「いかに師直、この唐櫃に入れ置きしは、兄尊氏に亡ぼされし新田義貞、後醍醐の天皇より賜はつて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄ての兜といひながら、そのまゝにも打ち置かれず。当社の御蔵に納むる条、その心得あるべしとの厳命なり」

と宣へば
武蔵守承り

「これは思ひも寄らざる御事。新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名、清和源氏はいくらもある。奉納の儀然るべからず候」と遠慮なく言上す

「イヤ、左様にては候まじ。この若狭助が存ずるは、これは全く尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちもらされ、御仁徳を感心し、攻めずして降参さする御方便と

とありければ

『はつ』と答への程もなく

馬場の白砂素足にて、裾で庭掃く打掛は、神の御前の玉箒、玉も欺く薄化粧、塩谷が妻の顔世御前、遙か下つて畏まる

女子好きの師直、そのまゝ声掛け

「塩谷殿の御内室顔世殿、最前よりさぞ待ち遠、御大儀々々々。御前の御召し、近うく」

と取り持ち顔
直義御覧じ

「召し出だすこと外ならず。往時元弘の乱れに、後醍醐帝都にて召されし兜を義貞に賜つたれば、最期の時に着つらん事疑ひはなけれども、その兜を誰れあつて見知る人ほかになし。その頃は塩谷が妻、十二の内侍のその内にて、兵庫司の女官なりと聞き及ぶ。さぞ見知りあらず。覚えあらば兜の本阿弥、目利き、目利き」

と女には、厳命さへも和らかに

お受け申すもまたなよやか

「冥加にあまる君の仰せ。それこそは私が、明け暮れ手馴れし御着の兜。義貞殿拝領にて、蘭奢待といふ名香を添へて賜はる。御取次はすなはち顔世。その時の勅答には、『人は一代、名は末代。すは討死せん時、この蘭奢待を思ふまゝ、内兜に焚きしめ着るならば、鬢の髪に香を留めて、名香薫る首取りしと言ふ者あらば、義貞が最期と思し召されよ』との詞はよもや違ふまじ」と申し上げたる口元に

下心ある師直は、小鼻いからし聞きゐたる

直義詳しく聞こし召し

「ホ、詳らかなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置いたり。見分けさせよ」

と御詫意の

下侍、屈むる腰の海老錠を、開くる間遅しと取り出だすを

おめず臆せず立ち寄つて、見れば所も名にし負ふ、鎌倉

山の星兜、とつぱい頭、獅子頭、さて指物は家々の、流儀々々によるぞかし

あるひは直平筋兜、鍔のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々多きその中にも、五枚兜の龍頭、『これぞ』と言はぬその内に、ぱつと香りし名香は

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

と差し出だせば

「左様ならぬ」

と一決し

「塩谷桃井兩人は宝蔵に納むべし。こなたへ来たれ」

と御座を立ち、顔世に御暇給はりて、段かづらを過ぎ給

へば

塩谷桃井兩人も、打ち連れ

恋歌の段

てこそ入りにける

あとに顔世はつきほなく

「師直様は今暫し、御苦労ながら御役目を御仕舞あつてお静かに。御暇の出たこの顔世、長居は畏れ、おさらば」

と立ち上る袖

摺り寄つて、じつと控へ

「コレマアお待ち、待ち給へ。今日の御用仕舞次第、其元へ推参して御目に掛ける物がある。幸ひの良い所、召し出だされた直義公は、我がための結ぶの神。ご存知の如く我ら歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範と頼み日々の状通。其元へ届けくれよと、問ひ合はせこの書状。いかにもこの御返事は、口上でも苦しくない」と袂から袂へ入るゝ結び文、顔に似合はぬ『様参る武蔵鑑』と書いたるを

見るより『はつ』と思へども、『はしたなう恥ぢしめてはかへつて夫の名の出ること。持ち帰つて夫に見せうか。いや／＼それでは塩谷殿、憎しと思ふ心から怪我過ちにもならうか』と、物をも言はず投げ返す

『人に見せじ』と手に取り上げ

「戻すさへ手に触れたりと思ふにぞ、わが文ながら捨ても置かれず。くどいは言はぬ。よい返事聞くまでは、口説いてく／＼口説き抜く。天下を立てうと伏せうとも、儘な師直。塩谷を生けうと殺さうとも、顔世の心たつた一つ。なんと、さうではあるまいか」

と聞くに顔世が返答も、涙ぐみたるばかりなり

折から来合はす若狭助、例の非道と見て取る気転

「顔世殿、また退出なされぬか。御暇の出で隙取るは、

かへつて上への畏れ。早やお帰り」

と追立つれば

『彼奴、さては気取りし』と弱味を食はぬ高師直

「ヤア又しても言はれぬ出過ぎ。立つてよければ身が立たず。この度の御役目、首尾よう勤めさせくれよと、

塩谷が内証顔世の頼み、さうなくては叶はぬ筈。大名でさへあの通り。小身者に捨て知行、誰が蔭で取らす。師直が口一つで御器提げうも知れぬ、危い身代。

それでも武士と思ふぢやまで」

と邪魔の返報憎て口

くわつとせきたつ若狭助、刀の鯉口砕くる程、握り詰めは詰めたれども、『神前なり、御前なり』と一旦の堪忍も今一言が生死の詞の先手

『還御ぞ』と、御先を払ふ声々に

詮方なくも期を延ばす、無念は胸に忘れず悪事さかつて運強く、切られぬ高師直を

明日はわが身の敵とも、知らぬ塩谷が後押さへ

直義公は悠々と、歩御なり給ふ御威勢

人の兜の龍頭、御蔵に入れる数々も、四十七字のいろは分け、仮名の兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ、国の掟ぞ

二段目

桃井館力弥上使の段

久方の

空も弥生の黄昏時、桃井若狭助安近の館の行儀掃き掃除、お庭の松も幾千代を守る館の執権職、加古川本蔵行国、年も五十路の分別盛り、上下ため付け書院先

歩み来るとも白州の下人

「なんと関内、この間は御上にはでつかちねえ御拵え。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社参、夥しい御物入り。ア、その金の入り目が欲しい。その金があつたらこの可介、名も改めて楽しむになあ」

「なんぢや、名を改めて楽しむとは珍しい。そりや又何と替える」

「ハテ、角助と改めて、胴を取つて見る気」

「ナニ馬鹿面な。わりや知らねえか。昨日鶴が岡でこれの旦那若狭助様、いかう不首尾であつたげな。子細

は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めてまた無理を抜かして、御旦那をやり込めをつたであらう」

とさがなき口々

「ヤイ、何をさはくと喧しい御上の取り沙汰。

ことに御前の御病氣、御家の恥辱になる事あらば、この本蔵聞き流し置くべきや。禍は下部の嗜み、掃除の役目仕舞うたら、皆行け、行け」

と和らかに、女小姓が持ち出づる煙草輪を吹く雲を吹く、廊下音なう衣の香や

本蔵が奔走の一人娘の小浪御寮

母の戸無瀬諸共に、しとやかに立ち出づれば

「これはく、兩人共御前のお伽は申さいで自身の遊びか、不行儀千万」

「イエ、今日は御前様、殊の外御機嫌、今すやくと御休み。それでナア母様」

「イヤ申し本蔵殿、先程御前の御物語。昨日小浪が鶴が岡へ御代参の帰るさ、殿若狭助様、高師直殿と詞争

ひ遊ばせしとの御噂。モ誰が言ふとなく御耳に入り、それはくきつい御案じ。『夫本蔵、子細詳しく知りながら自らに隠すのかや』と御尋ね遊ばす故、小浪に様子を尋ねれば、これも私と同じ事。『何も様子は存じませぬ』との御返事、御病氣の障り、御家の恥になる事なら」

「ア、コレく、戸無瀬、それ程の御返事、なぜ取り繕るふて申し上げぬ。主人は生得御短慮なる御生れ付き。何の詞争ひなどは女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより、身を果たすが刀の役目、武士の妻でないか。それ程の事に気が付かぬか。窘めさく。ナニ娘、そちはまた御代参の道すがら、左様の噂はなかりしか、但しあつたか。ナニ、ない、ム、その筈く。

ハ、ハ、何のべしでもない事を。よし、奥方の御心休め、直に御目に掛からん」

と立ち上がる折こそあれ
当番の役人罷り出で

「大星由良助様の御子息、大星力弥様御出でなり」

と申し上ぐる

「ム、お客御馳走の申し合はせ、判官殿よりの御使ひならん。こなたへ通せ。コレ戸無瀬、その方は御口上受け取り、殿へその通り申し上げられよ。御使者は力弥、娘小浪と言号の智殿、御馳走申しやれ。まづ奥方へ御対面」

と言ひ捨て一間に入りける

戸無瀬は娘を側近く

「ノウ小浪、父様の堅苦しいは常なれど、今仰つた御口上、受け取る役はそなたにとありそな所を戸無瀬にとは、母が心とはきつい違い。そもしも又力弥殿の顔も見たかる、逢ひたかる。母に代つて出迎や、ヤ。嫌か、嫌か」

と問ひ返せば

『アイ』とも『嫌』とも返答は、赤らむ顔のおぼこさよ母は娘の心を汲み

「アイタく。娘、背を押してたも」

「これは何と遊ばせし」

と慇懃に相述べ

小浪は『はつ』と手をつかえ、ぢつと見交はす顔と顔、互ひの胸に恋人と物も得言はぬ赤面は、梅と桜の花相撲に、枕の行司なかりけり

小浪漸々胸押し鎮め

「これはく御苦勞千万にようこそ御出で。只今の御口上受け取る役は私、御口上の趣きをお前の口から私が口へ、直に仰つて下さりませ」

と擦り寄れば

身を控へ

「ハア、これはく不作法千万。惣じて口上受け取り渡しは行儀作法第一」
と畳を下がり手をつかへ

「主人塩谷判官より若狭助様への御口上。『明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈のところ、定めて御客人も早々に御出であらん。然れば判官若狭助両人は、正七つ時にきつと御前へ相詰めよと、師直様より御仰せ。万事間違いのなき様に、今一応御使者に参れ』と

と狼狽へ騒げば

「イヤノウ今朝からの心遣ひ、また持病の癩が差し込んだ。アイタ、これではどうも御使者に逢はれぬ。アイタ、娘、大儀ながら御口上も受け取り、御馳走も申してたも。御主と持病には勝たれぬ、勝たれぬ」
とそろく立ち上がり

「娘や、随分御馳走申しや、ヤ。したが余り馳走過ぎ大事の口上忘れまいぞ。わしも智殿に、アイタく、逢ひたかるう」

の奥様は、氣を通してぞ奥へ行く

小浪は御後伏し拝みく

「忝ない母様、日頃恋し床しい力弥様、逢はさどう言を、かう言を」

と娘心のどぎくくと、胸に小浪を打ち寄する

畳触りも故実を糺し入り来たる大星力弥、まだ十七の角髪や、二つ巴の定紋に、大小立派さはやかに、さすが大星由良助が子息と見えしその器量、しづくくと座に直り
「誰そ、お取次頼み奉る」

主人判官申し付け候故、右の仕合はせ。この通り若狭助様へ御申し上げ下さるべし」

と水を流せる口上に

小浪はうっかり顔見とれ、とかう答へもなかりけり

「オ、聞いたく。使ひ大儀」

と若狭助、一間より立ち出で

「昨日お別れ申してより、判官殿間違うて御目に掛からず。成程正七つ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千万と、宜しく申し伝へてくれられよ。御使者大儀」

「ハ、ア、然らば御暇申し上げん。ナニ、お取次の女中御苦勞」
としづく立つて見向きもせず、衣紋

本蔵松切の段

繕ひ立ち帰る

本蔵一間より立ちかはり

「ハ、ア、殿、これに御入り。いよく、明朝は正七つ時に御登城、御苦勞千万。今宵も最早九つ、暫く御まどろみ遊ばされよ」

「ム、成程。イヤナニ本蔵、その方にちと用事あり、密々の事、小浪を奥へ、奥へ」

「ハツ、こりや娘、用事あらば手を打たう。奥へ、奥へ」

と娘を追ひやり、合点のいかぬ主人の顔色、御側へと立ち寄り、

「先程より御伺ひ申さんと存せしところ、委細つぶさに御仰せ下さるべし」

と差し寄れば
にじり寄り

「イヤナニ本蔵、今この若狭助が言ひ出す一言、何によらず『畏り奉る』と一言と返さぬ誓言聞かう」

「ハツ、こは改つた御詞。『畏り入り奉る』ではござれども、武士の誓言は」

「ならぬと言ふのか」

役は塩谷判官、某、兩人承るところに尊氏將軍よりの仰せにて、高師直を御添人、万事彼が下知に任せ御馳走申し上げよ。年輩といひ諸事物馴れたる侍と御意に従ひ勝つに乗つて日頃の我儘十倍増し。都の諸武士並居中、若年の某を見込み雑言過言、真二つにと思へども、御上の仰せを憚り、堪忍の胸を押へしはサ幾度か。明日は最早了簡ならず、御前にて恥面かゝせる武士の意地。その上にて討つて捨つる。ア、必ず留むるな。日頃某を短慮なりと、奥を始めその方が異見、胸にとつくと合点なれども、無念重なる武士の性根、家の断絶、奥が嘆き。思はんにてはなけれども、刀の役目弓矢神への畏れ。戦場にて討死はせずとも、師直一人討つて捨つれば天下のため、家の恥辱には代へられぬ。必ずく短気故に身を果す若狭助。猪武者よ、狼狽者と世の人口を思ふ故、汝にとつくと打ち明かすと思ひ込んだる無念の涙、五臓を貫く思ひなる
横手を打つて

「したりく。ム、よう訳を仰やつた、よう御了簡な

「イヤ、さにあらず。まづ委細とつくと承り」
「子細を言はせ後で異見か」

「イヤ、それは」

「詞を背くか」

「サ」

「サア」

「サ」

「サ、サ、なんとぢや」

「ハ、ア」

『はつ』とばかり差し俯き、暫く詞なかりしが

胸を極めて差添抜き、片手に刀抜き出だし、てうくと金打し

「本蔵が心底かくの通り、留めも致さず他言もせぬ。

まづ思し召しの一通り、お急ぎなされずと、本蔵めが胃の腑に落ち付く様にとつくりと承らん」

と相述ぶる

「ム、一通り語つて聞かせん。この度管領足利左兵衛督直義公、鶴が岡造營故この鎌倉へ御下向。御馳走の

された。この本蔵なら今まで了簡はならぬところ」

「ヤイ本蔵、ナ、なんと言つた。今まではよう了簡した堪忍したとは、わりやこの若狭助をさみするか」

「コハお詞とも覚えず。冬は日蔭夏は日面、避けて通れば門中にて、行き違ひの喧嘩口論ないと申すは町人の譬え。武士の家では杓子定規、避けて通せば方図がないと申すのが本蔵めが誤りか。御詞さみ致さぬ心底、御覧に入れん。サア殿、まづこの通りにさつぱりと遊ばせ、遊ばせ」

「オ、言ふにや及ぶ」

「ア、コレ、人や聞く」

と辺りに気を付け

「今夜はまだ九つ、ぐつたりと一休み。枕時計の目覚し本蔵めが仕掛け置く。サ、早く、早く」

「オ、聞き入れあつて満足せり。奥にも逢ふて余所ながらの暇乞ひ。本蔵、本蔵、面を上げい」

「ハ、ア」

「モウ逢はぬぞよ。さらば、さらば」

と言ひ捨て、奥の一間に入り給ふ、武士の意気地は是非もなし

御後ろ影見送りく、勝手口へ走り出で

「本蔵が家来共、馬引け早く」

と言ふ間もなく

股立しやんとりしげに、御庭に引き出だせば

縁よりひらりと打ち乗つて

「師直の館まで、続けや続け」

と乗り出だす

轡くわに縋つつて戸無瀬

小浪

「コレくどいへ、始終の様子は聞きました。年にこ

そよれ本蔵殿、主人に御異見も申さず、合点の行かぬ

留めます」

と母と娘がぶらくく、轡に縋り留むれば

「ヤア小差し出た。主人の御命、御家のため、思ふ故

にこの時宜、必ずこの事殿へ御沙汰致すな。お耳へ入

つたら娘は勘当、戸無瀬は夫婦の縁を切る。家来共、

道にて諸事を言ひ付けん。そこ退け兩人」

「イヤくくく」

「シヤ面倒な」

と鏡かがみの端はな、「と当てはつしと当てられて

『うん』とばかりのにつけに反るを

見向きもせず

「家来、続け」

と馬煙、追立て打ち立て力足、踏み立てこそ

三段目

下馬先進物の段

かけり行く

足利左兵衛督直義公、関八州の管領と新たに建てし御殿の結構、大名小名美麗を飾る晴れ装束、鎌倉山の星月夜と袖を連ぬる御馳走に、御能役者は裏門口、表御門は御客人、御饗応もてなしの役人衆、正七つ時の御登城、武家の威光ぞ輝きける

西の御門の見付の方、『ハイイく、ハイ』と厳めしく、提灯照らし入り来たるは武蔵守高師直、権威をあらはず鼻高々、花色模様の大紋に、胸に我慢の立烏帽子、家来共を役所々に残し置き、下部僅かに先を払はせ、主の威光の召しおろし

鶴の真似する鷺坂伴内、肩ひぢいからし

「申しお旦那、今日の御前表も上首尾々々々。塩谷で候のイヤ桃井で候のと、日頃はとつばさつばとどしめ

けど、行儀作法はえのころ狗を屋根へあげた様で、さりとはくく腹の皮。ヤそれにつき兼々塩谷が妻顔世御前、未だ殿へ御返事致さぬ由、御気にはさへられなく。器量はよけれど気が叶はぬ。なんの塩谷づれと当時出頭の師直様と」

「ヤイく声高に口きくな。主ある顔世、度々歌の師範に事寄せ口説けども、今に叶へぬ。すなはち彼が召使ひかるといふ腰元、新参と聞く。きやつをこまづけ頼んで見ん。さてまだ取得がある。顔世が誠に嫌ならば、夫塩谷に子細をぐはらりと打ち明ける、所を言はぬは楽しみ」

と四つ足門の片蔭に、主従うなづき話し合ふ折もあれ見付に控へし侍慌ただしく走り出で

「われわれ見付の御腰掛に控へし所へ、桃井若狭助家来加古川本蔵、師直様へ直きに御目に掛からんため早馬にて御屋敷へ参つたれども早や御登城。是非御意得奉らんと、家来も大勢召し連れたる体。いかゞ計らひ申さんや」

と聞くより
伴内騒ぎ出し

「今日御用のある師直様へ、直きに対面とは推参なり。
ヨシく某直談」

と走りゆくを

「待て、待て伴内、子細は知れた。一昨日鶴が岡にて
の意趣晴らし、我が手を出ださず本蔵めに言ひ付け、
この師直が威光の鼻をひしがんため。ハ、ハ、ハ、伴内ぬ
かるな。七つにはまだ間もあらん。これへ呼び出せ、
仕廻うてくれん」

「成程々々、家来共、ソーレ気を配れ」

と主従刀の目釘をしめし、手ぐすね引いて待ちかけある
詞に従ひ加古川本蔵、衣紋繕ひ悠々と打ち通り、下部に
持たせし進物共、師直が目通りに並べさせ、遙か下つて
蹲り

「ハ、憚りながら師直様へ申し上げ奉る。この度主
人若狭助、尊氏將軍より御大役仰せつけられ下さる段
武士の面目、身余る仕合せ。若輩の若狭助、なんの作

法も竟束なく、いかがあらんと存ずるところに、師直

様万事御師範を遊ばされ、諸事を御引き廻し下され候

故、首尾長く御用相勤むるも全く主人が手柄にあらず。
皆師直様の御取りなしと、主人を始め奥方一家中、我々

までも大慶、この上や候べき。さるによつて近頃些少
の至りに候へども、右御礼のため、一家中よりの贈り
物、お受け遊ばされ下さらば、生前の面目ひとしほ願
ひ奉る。すなはち目録御取次」

と伴内に差し出だせば

「ハ、ハ、ハ、ハ。エ、目録、一つ巻物三十本、黄金三十
枚、若狭助奥方。一つ黄金二十枚、家老加古川本蔵。

同じく十枚、番頭、同じく十枚、侍中。右の通り」
と読み上ぐれば

師直は開いた口塞がれもせずうつとりと、主従顔を見合
はせて、気抜けの様にきよろりと、祭の延びた六月の晦日
見るが如くにて、手持ち無沙汰に見えにける

俄かに詞改めて

「これは、これはく痛み入つたる仕合せ。伴内、こ

りやどうしたものの。テさて、御辞儀申さば御志背くと

いひ、第一は大きな無礼。イヤハヤ本蔵殿、なんの師
範致す程の事もないが、とかくマア、若狭助殿は器用
者。師範の拙者、及ばぬく。コリヤ伴内、進物共皆
取納め。エ、不行儀な。途中でお茶さへ得進ぜぬ」

と手の裏返す挨拶に

本蔵が胸算用、『してやつたり』と猶も手を付き

「最早七つの刻限、早やお暇。ことに今日はなほ晴れ
の御座敷。いよく主人の儀、御引廻し頼み存ずる」
と立たんとするを

押し留め

「テえいわいの。貴殿も今日のお座敷の座並、拝見な
されぬか」

「イヤ陪臣の某、御前の畏れ」

「大事ないく。この師直が同道するに、誰がぐつと
言ふ者ない。ことにまた若狭助殿も、なんぞれかぞれ
小用のあるもの。平にく」

と勧められ

「しからば御供仕らん。御意を背くはかへつて無礼。

先づお先へ」

と後に付き、金で面張の算用に、主人の命も買うて取る二
一天作算盤の、桁を違えぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の道は一
筋真直ぐに、打ち連れ

腰元おかる文使いの段

御門に入りける

程もあらず入り来たるは塩谷判官高定、これも家来を
残し置き、乗物道に立てさせ、譜代の侍早野勘平、朽葉
小紋のさら袴、ざわくざわつく御門前

「塩谷判官高定、登城なり」

とおとなひける

門番まかり出で

「先程桃井様御登城遊ばされ御尋ね。只今また師直様
御越しにて御尋ね。早や御入り」

と相述べ

「ナニ勘平、最早皆々御入りとや。遅なほりし、残念」
と勘平一人御供にて、御前へこそは急ぎ行く

奥の御殿は御馳走の、地謡の声播磨湯

「高砂の浦に着きにけり、高砂の浦に着きにけり

謡ふ声々門外へ、風が持て来る柳蔭、その柳より風俗は、
負けぬ所体の十八九、松の緑の細眉も、堅い屋敷に物馴
れし、奇特帽子の後帯

供の奴が提灯は塩谷が家の紋所

御門前に立ち休らひ

「コレ奴殿、やがてもう夜も明ける。こなた衆は門内
へは叶はぬ。こゝから去んで休んでや」

と詞に従ひ

「ナイ〜」

と供の下部は帰りける

内を覗いて

「勘平殿は何してぞ。どうぞ逢ひたい、用がある」

と見廻す折から後影

ちらと見付け

「おかるぢやないか」

「勘平様、逢ひたかつたにようこそ〜」

「ム、合点の行かぬ夜中といひ、供をも連れず只一人」

「さいなあ、こゝまで送りし供の奴は先へ帰した。私一人残りしは、奥様からの御使ひ。どうぞ勘平に逢うて

この文箱、判官様の御手に渡し、御慮外ながらこの返
歌を、御前の御手から直に師直様へお渡しなされ下さ
りませ、と伝へよ。しかし、御取込みの中、間違ふま

いものでなし。マア今宵はよしにせうとお詞。わた
しはお前に逢ひたい望み、なんのこの歌の一首や二首

お届けなさるゝ程の間ないことはあるまいと、つひ

一走り走つて来た。ア、しんどや」

と吐息つく

「しからばこの文箱、旦那の手から師直様へ渡せばよ
いちやまで。どりや渡して来う、待つてゐい」

と言ふ中に

門内より

「勘平、勘平々々、判官様が召します。勘平々々」

「ハイ、ハイ〜只今それへ。エ、忙しい」

と袖振り切つて行く後〜

どぢやう踏む足付き、鷺坂伴内

「おかぼう〜、コレおかぼう。なんとおかる、恋の

智恵はまた格別。勘平めとせ〜くつて居るところを、

『勘平々々、旦那がお召し』と呼んだは、きついか

〜きついか。師直様がそもじに頼みたいことがある

と仰しやる。我らはそ様にたつた一度、君よ〜」

と抱き付くを

突き飛ばし

「コレ、淫らなこと遊ばすな。式作法の御家にゐなが
ら狼藉千万。あた不法なあた不行儀」

と突き退くれば

「それはつれない、暗がり紛れについちよ〜」

と手を取り争ふその中に

「伴内様々々々、師直様の急御用、伴内様々々々」

と奴二人がうろ〜眼玉で

「ヤ、これはしたり伴内様。最前から師直様が御尋ね。

式作法の御家にゐながら、女を捕へあた不行儀な、あ

た不法

と下部が口々

「エ、同じ様に何ぬかす」

と面膨らして、連れ立ち行く

勘平後へ入れ替り

「なんと、今の働き見たか。伴内めが一杯喰らうて失

せをつた。俺が来て旦那が呼ばしやると言ふと、『おけ、

古い』とぬかすが面倒きに、奴共に酒呑ませ、古いと

言はさぬこの方便。まんまと首尾は仕おほせた」

「サアその首尾ついでに、ちよつと、ちよつと」

と手を取れば

「ハテサテはづんだ、マア待ちやいの」

「何言はんすやら、何の待つことがあるぞいな。もう

やがて夜が明けるわいな。是非に、是非に」

に是非なくも、下地は好きなり御意は善し

「それでもこゝは人出入り」

奥は謡の声高砂

「松根に倚つて腰をすれば」

「才、あの謡で思ひ付いた。イヤ腰掛で」と手を引き合ひ、打ち連れてこそ

殿中刃傷の段

急ぎ行く

脇能過ぎて御楽屋に、鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌斜めならざりける

若狭助は兼ねて待つ『師直遅し』と御殿の内、奥を伺ふ長袴の紐締め括り気配りし、『おのれ師直、真二つ』と刀の鯉口息を詰め、待つとも

知らぬ師直主従、遠目に見付け

「ヤこれはく若狭助殿、テサテお早い御登城。イヤハヤ我折りました、我ら閉口々々。イヤ閉口つひでに貴殿に言訳致し、お詫び申す事がある」

と両腰ぐはらりと投げ出だし

「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。ア、いつ

ぞや鶴が岡で拙者が申した過言。サ、お腹が立つたであらう、尤もぢやくく、がそこをお詫び。その時はど

うやらした詞の間違ひでつひ申した。我ら一生の粗忽。武士がコレ手を下げる、真平々々。仮令其元が物馴れたお人なりやこそ、ほかくの狼狽者で見さつしやれ。

この師直真二つ。オ、怖やのくアハハハハ。あり様がその節、貴殿の後影手を合はして拝みましたアハハハ。ア、年寄ると益体々々、年に免じて御免々々。

これさくく武士が刀を投げ出だし手を合はず。これ程に申すのを聞き入れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも謝りく。珍才、共々にお詫びく」

と金が言はする追従とは

夢にも知らぬ若狭助、力みし腕も拍子抜け、今更抜くに抜かれもせず、寝刃合はせし刀の手前、差し俯きし思案顔

小柴の蔭には本蔵が、瞬きもせず守りゐる

「ナニ珍才、この塩谷はなぜ遅い。ア、若狭助殿とはきつい違ひ、テサテ不行儀者。今において面出しせぬ。

先刻から申し渡したでないか」

「ハ、成程、遅なはりしは不調法。さりながら、御前へ出づるはまだ間もあらん」

と袂より文箱取り出だし

「最前手前の家来が、貴公へお渡し申しくれよ、すなはち奥顔世方より参りし」

と渡せば

受け取り

「成程々々。イヤ其元の御内方はテさて心掛けがござるは。手前が和歌の道に心を寄せるを聞き、添削を頼むとある。定めてその事ならん」

と押し開き

「ア、『さなきだに重きが上の小夜衣、わがつまならぬ、つまな重ねそ』わがつまならぬ、つまな重ねそ。

ム、これは新古今の歌。この古歌に添削とは、ム、

ム」

と思案の中、『わが恋の叶はぬ印、さては夫に打ち明けし』と思ふ怒りを、さあらぬ顔

主が主なれば家老で候とて、諸事に細心のつく奴が一人もない。いざく若狭殿、御前へ御供致そ。サ、お立ちなされく。師直め、謝つてをるぞ。コレこな粹めく、粹様め」

「イヤ、若狭助最前よりちと心悪くござる。マア先へ」

「何としたく、腹痛か。コレサ珍才、お背中く。」

お薬進ぜうかな」

「イヤくそれ程にもござらぬ」

「然らば少しの内御くつろぎ。御前の首尾は我れらが良い様に申し上ぐる。珍才、一間へ御供申せ」

と主従寄つて御手車に

迷惑ながら若狭助、『これは』と思へど是非なくも、奥の一間へ入りければ

「ア、もう楽ぢや」

と本蔵は、天を拝し地を拝し、お次の間にぞ控へゐる程もあらず塩谷判官、御前へ通る長廊下

師直呼びかけ

「遅しく。なんと心得てゐる。今日は正七つ時と、

「ホ、喧嘩の次第相済んだ。出頭の師直様へ慮外致せし科によつて、塩谷判官は閉門仰せ付けられ、網乗物にてたつた今帰られし」

と聞くより

「ハア南無三宝、お屋敷へ」

と走りかゝつて

「イヤくくく、閉門ならば館へはなほ帰られじ」

と行きつ戻りつ思案最中

腰元おかるは道にてはぐれ

「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何とせうどうせう」

と取り付き嘆くを

取つて突き退け

「エ、めろくくと吠え面。コリヤ、勘平が武士は廃つたわやい。もうこれまで」

と刀の柄

「ア、コレ待つて下され。こりや狼狽へてか勘平殿」

「オ、狼狽えた。これが狼狽えずに居られうか。主人

と身拵えするそのところへ

鷺坂伴内、家来引き連れ駆け出で

「ヤアく勘平。うぬが主人の塩谷判官、おらが旦那の師直様と、何か知らぬが殿中に於て、あつちやの方でぼつちやくちや、こつちやの方でべつちやくちや、ちやつちやくちやくく咄の内、小さ刀をちよいと抜いてちよいと切つた科によつて、屋敷は閉門網乗物にてエツサツサ、エツサツサ、エツサ、エツサ、エツササとぼつ帰した。追付け首がころりと飛ぶは知れたこと。サア腕廻せ、連れ帰つてなぶり切り、覚悟ひろげ」

とひしめけば

「ムウ、ムウ、ムハ、ハ、ハ、ハ、ヤアよい所へ鷺坂伴内。

おのれ一羽で食ひ足らねど、勘平が腕の細ねぶか、料理塩梅食らうて見よ」

「ヤア物な言はずな家来共」

「畏つた」

と両方より

「捕つた」

一生懸命の場にも在り合はさず、あまつさへ囚人同然の網乗物、お屋敷は閉門、その家来は色に耽り御供に外れしと、人中へ両腰差して出られうか。こゝ放せ」

「マアく待つて下さんせ」

「イヤサ放せ」

「マアく待つて、下さんせいなあ。尤もぢや道理ぢや、がその狼狽え武士には誰がした。皆わしが心から、死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢやと褒めます。こゝをとつくりと聞き分けて、私の親里へひとまづ来て下さんせ。父様も母様も在所でこそあれ頼もしい人。もうかうなつた因果ぢやと思ふて女房の言ふ事も、聞いて下され勘平殿」

とわつとばかりに泣き沈む

「オ、さうぢや、尤もそちは新参なれば、委細の事は得知るまい。御家の執権大星由良助殿、未だ本国より帰られず。帰国を待つてお詫びせん。サア、一時なりとも急がん」

と掛かるを

「まつかせ」

とかい潜り、両手に両腕捻ぢ上げ、はつしくと蹴返せば

代つて切り込む切先を

刀の鞘にて丁ど受け

廻つて来るを

こじりと柄にてのつけに反らし

四人一緒に切り掛かゝるを

右と左へ一時に、田楽返しにばたくくと打ち据ゑられ

皆散り散りに行く後へ

伴内いらつて切りかくる

引外し素首握り、大地へどうどもんどり打たせ、しつか

と踏み付け

「サア、どうしようとうとうしやうとこつちの儘。突か

うか切らうか、なぶり殺し」

と振り上げる

「二人共に争ひ無用。今度夫の御難儀なさるゝ元の起
こりはこの顔世。いつぞや鶴が岡で饗応の折から、道
知らずの師直、主のある自らに無体な恋を言ひかけ、
様々と口説きしが、恥を与へ懲りさせんと、判官様に
も知らさず、歌の点に事寄せ、小夜衣の歌を書き恥ぢ
しめてやつたれば、恋の叶はぬ意趣晴らしに判官様に
悪口。元より短気なお生まれ付き、得堪忍なされぬは
お道理でないかいの」

と語り給へば

郷右衛門

力弥も共に御主君の、御憤りを察し入り、心外面に頭は
せり

『早や御上使の御出で』と玄閑広間ひしめけば

奥へかくと通じさせ、御台所も座を下り、皆々

塩谷判官切腹の段

出迎ふ間もなく

し、切腹申し付くるものなり」

聞くより『はつ』と驚く御台

並み居る諸士も顔見合はせ、呆れ果てたるばかりなり

判官動ずる気色もなく

「御上意の趣き、委細承知仕る。さてこれからは各々

の御苦勞休めに、打ち寛いで御酒一つ」

「コレ／＼判官、黙り召され。その方が今度の科は縛
り首にも及ぶべきところ、御上の慈悲を以て切腹仰せ
つけらるゝを有難う思ひ、早速用意もすべき筈。こと
にもつて、切腹には定まった法のあるもの。それに何
ぞや、当世様の長羽織、ぞべらくとしらるゝは、酒興
か但し血迷ふたか。上使に立つたる石堂殿、この薬師
寺へ不作法」

ときめつくれば

につこと笑ひ

「この判官酒興もせず、血迷ひもせぬ。今日上使と聞
くよりも、かくあらんと期したる故、兼ねての覚悟見
すべし」

入り来る上使は石堂右馬之丞
師直が昵近薬師寺次郎左衛門

「役目なれば罷り通る」

と会釈もなく、上座に着けば

一間の内より塩谷判官、しづ／＼と立ち出で

「これは／＼、御上使とあつて石堂殿、御苦勞千万。

まづお盃の用意せよ。御上使の趣承り、いづれもと

一献酌み、積鬱を晴らし申さん」

「オ、それようござら、薬師寺もお間致さつ。したが

上意を聞かれたら、酒も喉へは通るまい」

とあざ笑へば

右馬之丞

「我々今日上使に立つたるその趣き、つぶさに承知せ

られよ」

と懐中より御書取り出だし、押し開けば

判官も、席を改め承るその文言

「この度、塩谷判官高定、私の宿意を以て、執事高師
直を刃傷に及び、館を騒がせし科によつて、国郡を没収

と大小羽織脱ぎ捨つれば、下には用意の白小袖、無紋の

上下死装束

皆々『これは』と驚けば

薬師寺は言句も出でず、面腫らして閉口す

右馬之丞差し寄つて

「御心底察し入る。即ち拙者檢使の役、心静かに御覚

悟」

「ハ、御深切忝なし。刃傷に及びしよりかくあらん
とは兼ねての覚悟。恨むらくは館にて、加古川本蔵に
抱き留められ、師直を討ち洩らし、無念骨髓に通つて
忘れ難し。湊川にて楠正成、最期の一念によつて生を
引くといつし如く、生き替り死に替り鬱憤を晴らさん」

と怒りの声と諸共に

お次の襖打ち叩き

「一家中の者共、殿の御存生に御尊顔を拝したき願ひ、

御前へ推参致さんや、郷右衛門殿お取次、郷右衛門殿

お取次」

と家中の声々聞こゆれば

郷右衛門、御前に向ひ

「いかゞ計らひ候はん」

「ムウ、尤もなる願ひなれども、由良助が参るまで無用々々」

「ハツ、ハ、ハツ」

とばかり一間に向ひ

「聞かるゝ通りの御意なれば、一人も叶はぬ、叶はぬ」諸士は返す詞もなく、一間もひつそと静まりける

力弥御意を承り、兼ねて用意の腹切刀、御前に直すれば心静かに肩衣取り退け座を寛げ

「力弥」

「ハ、ハツ」

「由良助は」

「未だ到着仕りませぬ」

「ム、存生に對面せで残念、残り多やな。コレく御検使、御見届け下さるべし」

と三方引寄せ九寸五分押し頂き

「力弥、力弥」

「ハツ、ハ、ハツ」

「由良助は」

「ハ、ハツ」

「未だ参上仕りませぬ」

「ム、是非に及ばぬ。これまで」

と刀逆手に取り直し、弓手に突き立て引き廻す

御台二た目と見もやらず、口に称名目に涙

廊下の襖踏み開き駆け込む大星由良助、主君の有様見るよりも

「ハツ、ハツ、ハ、ハツ、ハツ」

とばかりにどうど伏す

後に続いて千崎、矢間、その他の一家中、ばらばらと駆け入つたり

「国家老大星由良助、只今到着仕りました」

「ナニ、由良助とな。最期の對面苦しいない、近う」

「ハツ」

「近う」

「ハツ」

「近うく、近う」

「ハツ、ハツ、ハツ、ハ、ハ、ハ」

「ヤレ由良助、待ち兼ねたわやい」

「ハ、御存生の御尊顔を拝し、身にとつて何程か」

「オ、我も満足々々。定めて子細聞いたであろ。聞いたか、聞いたか。チエ、無念、口惜しいわやい」

「ハ、委細承知、仕る。この期に及び申し上ぐる詞もなし。たゞ御最期の尋常を願はしう存じまする」

「オ、言ふにや及ぶ」

と諸手を掛け、ぐつくと引き廻し、苦しき息をほつとつき

「由良助、この九寸五分は汝へ形見。わが鬱憤を晴ら

させよ」

と切先にて笛刎ね切り、血刀投げ出しうつ伏せに、どうど転び息絶ゆれば

御台を始め並み居る家中眼を閉ぢ息を詰め、齒を喰ひし

ばり控ゆれば

由良助にじり寄り、刀取り上げ押し頂き、血に染まる切

先を打ち守りく、拳を握り無念の涙はらくく

判官の末期の一句五臓六腑に染み渡り、さてこそ末世に大星が忠臣義心の名を挙げし、根差はかくと知られけり

薬師寺は突立ち上がり

「判官がくたばるからは、早々屋敷を明け渡せ」

「イ、ヤ、さは言はれな薬師寺。言はゞ一國一城の主。方々、葬々の儀式取りまかなひ、心静かに立ち退かれ

よ。この石堂は検使の役目、切腹を見届けたれば、この旨を言上せん。ナニ由良助殿、御愁傷察し入る。用事あらば承らん。必ず心置かれな」

と並み居る諸士に目礼し、悠々として立ち帰る

「この薬師寺も死骸片付くるその間、奥の間で休息せ

う。家来参れ」

と呼び出だし

「家中共がらくた道具、門前へ放り出せ。判官が所持の道具、ソレ俄か浪人にまげられな」

と館の四方を睨め廻し、一間の内へ入りにける

御台は一間を転び出で

はつたと睨んで

「ノウ由良助、さてもく、武士の身の上程悲しいものゝあるべきか。今夫の御最期に言ひたい事は山々なれど、未練など御上使のさげしみが恥づかしさに、今まで堪えてゐたわいの。いとをしの有様や」

と亡骸に抱き付き、前後も分かず泣き給ふ

「力弥、参れ。御台所諸共亡君の御骸を、御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良助も後より追付き、葬送の儀式執り行なはん。堀、矢間、小寺、間、その他の一家中、道の警護致されよ」

と詞の下より御乗物、手舁に舁き据え戸を開き、皆立ち寄つて御死骸、涙と共に乗せ奉り、しづくと舁き上ぐれば

御台所は正体なく、嘆き給ふを

慰めて、諸士の面々我れ一と、御乗物に引添ひく、御菩提

城明渡しの段

五段目

山崎街道出合の段

立ち出づる

鷹は死しても穂は摘まずと、たとへに洩れず入る月や、日数も積もる山崎の辺りに近き侘び住居

早野勘平若気の誤り世渡る元手細道伝ひ、この山中の鹿猿を撃つて商ふ種ヶ島も、用意に持つや袂まで、鉄砲雨のしだらでん、誰が水無月と夕立の、晴れ間をこゝに松の蔭

向ふより来る小提灯、これも昔は弓張の、灯火消さじ濡らさじと、合羽の裾に大雨を、凌いで急ぐ夜の道

「イヤ申しく、卒爾ながら火を一つ御無心」と立ち寄れば

旅人もちやくと身構へし

「ム、この街道は無用心と知つて合点の一人旅。見れば飛道具の一口商ひ。得こそは貸さじ出直せ」

とひくと動かば一討と、眼を配れば

「イヤサ成程、盗賊とのお目違ひ、御尤も千万。我らはこの辺りの狩人なるが、先程の大雨に、火口も湿り難儀至極。サア鉄砲それへお渡し申す。自身に火を付け御貸し」

と他事なき詞顔付を

きつと眺めて

「和殿は早野勘平ならずや」

「さ言ふ貴殿は千崎弥五郎」

「これは堅固で」

「御無事で」

と絶えて久しき対面に、主人の御家没落の、胸に忘れぬ無念の思ひ、互ひに拳を握り合ふ

勘平は差し俯き、暫し詞もなかりしが

「ハ、面目もなき我が身の上、古朋輩の貴殿にも、顔も得上げぬこの仕合せ、武士の冥加に尽きたるか。殿判官公の御供先、御家の大事起こりしは、是非に及ばぬ我が不運。その場にもあり合はせず、御屋敷へは帰

られず。所詮時節を待つて御詫びと、思ひの外の御切腹。南無三宝、皆師直めが為す業。せめて冥途の御供と刀に手は掛けたれど、何を手柄に御供と、どの面提げて言ひ訳せんと、心を碎く折から、密かに様子を承れば、由良殿御親子、郷右衛門殿を始めとして、故殿の鬱憤散ぜんため、寄りくくの思し召し立ちあるとの噂。我らとても御勘当の身といふでもなし、手掛り求め由良殿に对面遂げ、御企ての連判に御加へ下さらば、生々世々の面目。貴殿に逢ふも優曇華の、花を咲かせて侍の、一分立てゝ給はれかし。古朋輩のよしみ武士の情け、御頼み申す」

と両手を付き、先非を悔いし男泣き、理りせめて不憫なる

弥五郎も朋輩の悔み道理と思へども、『大事をむさと明かさじ』と

「コレサ、コレサ勘平、てさて御手前は身の言ひ訳に取り混せて、御企てのイヤ連判などとは何の戯言。左様な噂かつてなし、左様な噂かつてなし。某は由良殿

はじ。御用金を手掛りに郷右衛門殿までお取次ぎ、一入頼み存する」

と余儀なき詞に

「ム、成程、然らばこれより郷右衛門殿まで、右の訳をも話し、由良殿に願ふて見ん。明々日は必ずきつと御返事。すなはち郷右衛門殿の旅宿の所書き」

と渡せば

取つて押し頂き

「重々の御世話忝なし。何とぞ急に御用金を拵え、明々日御目に掛からん。某が在所御尋ねあらば、この山崎の渡し場を左へ取り、与市兵衛と御尋ねあらば、早速相知れ申すべし。夜更けぬうちに早くも御出で。ア、コレ、この行先はなほ物騒、随分ぬかるな」

「合点々々。石碑成就するまでは、蚤にも食はさぬこの身体。御辺も堅固で、御用金の便りを待つぞ。さらば」

「からば」

と両方へ、立ち別れてぞ

より郷右衛門殿へ急ぎの使ひ。先君の御廟所へ御石碑を建立せんとの催し。しかし我々とても浪人の身の上これこそ塩谷判官の御石塔と、末の世までも人の口の端にかゝるもの故、御用金を集むるその御使ひ。先君の御恩を思ふ人を選び出すため、わざと大事を明かさず。先君の御恩を思はゞ、ナ、合点か、サ合点か」と石碑になぞらへ大星の、企みを余所に知らせしは、実に朋輩のよしみなり

「ハ、忝ない弥五郎殿。成程、石碑と言ひ立て御用金の御拵えある事、とづくに承り及び、某も何とぞして用金を調べ、それを力に御詫びと、心は千々に砕けども、弥五郎殿、恥づかしや主人の御罰で今このごま。

誰にかうとの便りもなし。されどもかるが親与市兵衛と申すは、頼もしい百姓。我々夫婦が判官様へ不奉公を悔み嘆き、何とぞして元の武士に立ち返れと、おじうば共に嘆き悲しむ。これ幸ひ、御辺に逢ひし物語、段々の子細を語り、元の武士に立ち返ると言ひ聞かさば、わづかの田地も我が子のため、何しに否は得も言

二つ玉の段

急ぎ行く

又も降り来る雨の足人の足音とぼくと、道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も、直ぐなる心堅親仁、一筋道の後から

「オーイ、オイ親父殿、先から呼ぶ声が貴様の耳へは這入らぬか。この物騒な街道をよい年をして大胆々々。連れにならう」

と向うへ廻りきよるつく眼玉ぞつとせしが、さすがは老人

「これはくお若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして一人旅は嫌なれど、サアいづくの浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰まりこの中から一家中の在所へ無心に往たれば、これもびた平な才覚ならず。埒の明かぬ所に長居はならず、すぐく一人戻る道」

と半分言はさず

「ヤイ／＼喧しいわい。有様が年貢の納まらぬ、その世迷ひ言を聞きには来ぬ。コレ親仁殿、俺が言ふ事とつくと聞かしやれ、マアかうぢや。こんたの懐に金なら四五十両の嵩、縞の財布にあるのを、とつくりと見付けて来たのぢや。貸して下され、コレ男が手を合はす。定めて貴様も何ぞつまらぬ事か、子が難儀に及ぶによつてといふ様な、ある格な事ぢやあるうけれど、俺が見込んだら、ハテしよ事がないと諦めて、貸して下され、貸して下され」

と懐へ手を差し入れ、引ずり出だす縞の財布

「ア、申し、それは」

「それはとは、エ、これ程こゝにあるもの」

とひつたくる手に

縫り付き

「イエ／＼、これは金ではござりません。この財布は後の在所で草鞋買ふとて端銭を出しましたが、後に残るは昼食の握り飯。霍乱せん様にと娘がくれた和中断、反魂丹でござります。お赦しなされて下さりませ」

とひつたくり逃げ行く先へ立ち塞がり

「エ、聞き分けのない。酷い料理するが嫌さに、手緩う言へばつけ上がる。サア、その金こゝへ捲き出せ。遅いとたつた一討ち」

と二尺八寸拝み討ち

「ノウ悲しや」

と言ふ間もなく

唐竹割りと切り付くる、刀の廻りか手の廻りか、外れる拔身を

両手にしつかと掴み付き

「どうでもこなた、殺さしやるのぢやの」

「オ、知れた事ぢや。金のあるのを見てする仕事。

小言吐かずとくたばれ」

と肝先へ刺しつければ

「マア／＼待つて下さりませ、ハテマお待ちなされて下さりませ。ハア是非に及ばぬ。成程、成程これは金でござります」

「それ見やがれ」

「サ、けれども、この金は私にたつた一人の娘がござる、その娘が命にも代へぬ大事の男がござります、その男のために要る金。ちと訳がある事故浪人して居ります。娘が申しまするは、『あの人の浪人も元は私

故、何とぞして元の武士にして進ぜたい、進ぜたい』

と婆とわしとへ毎夜さの頼み。身貧にはござりまする。

どうも仕覚の仕様もなく、婆と色々談合して娘にも呑

み込ませ、京の祇園町へ勤め奉公。モそれは／＼親子

三人が血の流れる金。それをお前に取られまして

娘はなんとなりませんぞい、娘はなんとなりませんぞ

いの。マア一里行けば私が在所、金を簀に渡してから

殺されませう。申し、申し、娘が喜ぶ顔見てから死に

たうござります、サ、／＼さりとはお情けない。ア、

かういふ事とは露知らず、さぞ女房子が待ちおらうと、

そればつかりが気に掛かり、冥途の道をうろ／＼と迷

ひまする」

とせき上げて、取り乱したる恩愛の心ぞ思ひやられたり

「貧乏寺の念仏の声、ア、悲しいこつちや。もつととこぼえ、ヤイ老いぼれめ。その金で俺が出世すりや、その恵みでうぬが倅も出世するわやい。人に慈悲すりや悪うは報はぬ。ア、可愛いや」

とぐつと突く

『うん』と手足の七転八倒、のたくり廻るを

脛にて蹴返し

「ア、いとしや、痛かるけれど俺に恨みはないぞや。

金がありやこそこんたを殺せ、金がなけりやコレなん

のいの。金が敵の世の中だ、アハ、／＼。これおと

つ、あんえ、今極楽へ参る様にこの定九上人様が結構

な御引導をお授けなさるゝ。ア、南無阿弥陀仏／＼、

南無妙法蓮華経。南無妙、ちよいとな法蓮華経、南無

妙法蓮華経、あれわいなこれわいな、よいやませ。

どちらへなりと失せをろ」

と刀も抜かぬ芋ざし抉り

草葉も朱に置く露や、年も六十四苦八苦、あへなく息は絶えにけり

『仕済ましたり』と件の財布、暗がり耳の掴みよみ

に

「まづ親父めは片付けた。しかしこの金はなんぼ程あるか知らぬてちよつと中を拝見を致そうかい。まづこれで十両、二十、三十、四十、五十両アハハハハ。」

久し振りのご対面、忝なし」

と首にひつ掛け、死骸をすぐに谷底へはね込み蹴込み泥まぶれ、はねは我が身にかゝるとも知らず立つたる後より、逸散に来る手負ひ猪

「これはならぬ」

と身をよぎる

駆け来る猪は一文字

木の根岩角踏み立て蹴立て、只一まくりには飛び行けば

『あはや』と見送る定九郎が

背骨をかけてどつさりと、肋へ抜ける二つ玉、ふすぼり

返つて死したるは、心地よくこそ見えにけれ

『猪撃ち留めし』と勘平は、鉄砲引提げこゝかしこ

「ヤこりや人」

『天の与へ』と押し頂き、猪より先へ逸散に飛ぶが如く

六段目

身売りの段

急ぎける

所も名に負ふ山崎の小百姓与市兵衛が殖生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし髪取り上げんと櫛箱の、晝かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投げ島田、品よくしやんと結び立てしは在所に惜しき姿なり

母の齢も杖つきの、野道とぼく、立ち帰り

「オ、娘、髪結ひやつたか。美しうよう出来た。イヤモ、在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も敷隙で

若い衆が麦かつ歌に、『親父出て見やばゝん連れて』と唄ふを聞き、親父殿の遅いが気に掛かり在口まで行たれど、ようなう影も形も見えぬ」

「サイナア、こりやまあどうして遅い事ぢや。わし、一走り見て来やんしよ」

「イヤノウ、若い女子の一人歩くは要らぬ事。ことにそなたは小さい時から在所を歩くことさへ嫌ひで、塩谷様へ御奉公にやつたれど、どうでも草深い所に縁があるやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬ」

「オ、母さんのそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの、在所はおるか貧しい暮らしても苦にならぬ。やんがて盆になつて、『とさま出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたつた二人、踊り見に行きやんしよ。母さん、お前も若い時覚えがあら」

と差し合ひくらぬぐわら娘、気もわさくと見えにける
「イヤノウ、なんぼその様に面白をかしよう言やつても、心の中はの」

「イエく、済んでござんす。主のために祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄つて父さんの世話やかしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど兄も塩谷様の御家来

なれば、外の世話する様にもない」
と親子話の中道伝ひ

駕籠を昇かせて急ぎ来るは祇園町の一文字屋

「東山のナア、東山のナア、お月や出やるく、中田圃たんぼにちやつと出やる

「コウツト、確かこの松の木から一軒二軒三軒目。オ、こゝぢや、こゝぢや」

と門口から

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば

「これはマアく遠い所を。ソレ娘、煙草盆、お茶あげましや」

と親子して槌おうえで御上を

白人屋の亭主

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀。別条なり戻られましたかな」

「エ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前へ往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬか。テ面妖な。ハ、ア、もし稲荷前をぶらついてかの玉たまどんにヤ摘まりやせぬかの。コレこ

の中こゝへ見に来て極めた通り、お娘むすめの年も丸五年切り。給銀は銀百両、さらりと手を打った。がこれの親父が言はるゝには、『今いま夜中に渡さねばならぬ金あれ

ば、今晚証文を認め、百両の金子お貸しなされて下さい』と戻をこぼしての頼み故、証文の上で半金渡し、

残りは奉公人と引き換えの契約。何がその五十両渡すとの、喜んで戴きほたく言ふて戻られたはもう四つ

でもあらうかい。夜道を一人金持つてゐらぬものと留めても聞かず戻られたが、但しは道に」

「イエく、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないともく。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せき戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「ヤアコレ、合点のいくいかぬはそつちの穿鑿せんさく。こつ

ちは下がりの金渡しして、奉公人を連れて去の」と懐より金取り出だし

その意を得ず

「どうでも深い訳がある。母者人、女房共、様子聞かう」

と御上の真中、どつかと座れば

文字の亭主

「ハ、ア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。イヤモ、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許

婚の夫などと脇より違乱ちがいらん妨げ申す者これ無く候』と親父の印形あるからは、こちには構はぬ。サア早う奉公人を受け取らうかい」

「オ、賀殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調べて進ぜたいと言

ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親父殿の言はしやるには、ひよつとこなたの気に、女房売つて金調

へよと、よもや思おもつてではあるまいけれど、もし二親ふたおやの手前を遠慮してゐやしやるまいものでもない。いつそ

この与市兵衛が賀殿に知らさず娘を売らう。まさかの時は切り取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはな

門の口、鉄砲に蓑笠打ち掛け戻りかゝつて見る勘平、つかくゝと内に入り、
「駕籠の中なは女房ども、コリヤマアどこへ」
「オ、勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」
と母の喜び

らぬ。お主の役に立つる金、調へておましたら満更腹も立つまいと、昨日から祇園町へ折極めに往て今に房らしやれぬ故、親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、昨夜親父殿に半金渡し後金の五十両と引き換へに娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上とモ訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるところ。どうせうぞ、勘平殿」

「ハ、これはく、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがごちにもちつとよい事があれども、マ、それは追つて。イヤコレ親父殿も戻られぬに、女房共は渡されまい」

「とはまたなぜに、とはなぜに」

「ハテ、いはど親なり判がり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「ア、これいのコレ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋。渡さぬ金を渡したと言ふて済むものかいの、コレ済むかいの。まだその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭

行きやらずばなるまいかい」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」

「ア、イヤく、親父殿にも今朝ちよつと逢うた。が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父さんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばかり」

と言ふに

文字も凶に乗つて

「それを見みいなどうえ。七度尋ねて人疑へぢや。親父の在り所の知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともいでんど沙汰。ガマアくさらりと済んでめでたいく

ハ、ハ、ハ、ヤコレお袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。コレお娘、早う駕籠に乗りやく」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、どうでこなさんのみんな世話。取り分けて父さんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

にヤくるくくと巻いて懐に入れらるゝ。『ア、そりや危ないく。これに入れて首に掛けさつしやれ』と俺が着てゐる、かう、かうくこの単物の縞の切れで拵えた金財布貸したれば、やんがて首に掛けて戻られう」

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの金財布か」

「オ、てや」

「あのこの縞、でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」と聞くより『ハツ』と勘平が肝先にひしと堪え、傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違はぬ糸入り縞『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは舅であつたか、ハア、ハツ』と我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ

とは知らずして女房

「コレこちらの人、そはくせずと遣るものか遣らぬものか、分別して下さい」

「成程。ハテモウ、あの様に慥かに言はるゝからは、

と親の死に目を露知らず、頼む不憫さいぢらしさ

『いつぞ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と心を痛め堪えゐる

「オ、聾殿、夫婦の別れ暇乞がしたかるけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であるぞいのう」

「イエく、なんぼ別れても主のために身を売れば、悲しうもなんともない。わしや勇んで行く、母さん、したが父さんに逢はずに行くのが」

「オ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に爰据えて息災な顔見せに来てたも

ヤ

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイナア」

「鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。ア、ソレ、とばつて怪我しやんな」

と駕籠に乗るまで心を付け

「ちらばや」

「ちらば」

「なんの因果で人並な娘を持ちこの悲しい目を見る事
ちや」

と齒を喰ひしぼり泣きければ

娘は駕籠にしがみつ、泣くを知らさじ聞かさじと声をも立てず咽せ返る

情けなくも駕籠昇き上げ、道を

早野勘平腹切の段

早めて急ぎ行く

母は後を見送りく

「ア、よしない事言ふて娘もさぞ悲しかろ。オ、こな人わいの、親の身でさへ思ひ切りがよいに、女房の事ぐづく思ふて煩うて下さんな、ヤア。この親仁殿はまだ戻らしやれぬ事かいの。こなた逢ふたと言はしや

つたの」

「成程」

「そりやマアどこらで逢はしやつて、どこへ別れて往かしやつた」

「されば、別れたその所は、鳥羽か伏見か淀竹田」

と口から出次第

めつぼう弥八、種が島の六、狸の角兵衛、所の狩人三人連れ、親仁の死骸に蓑打ち着せて戸板に乗せ、どやくと内に入り

「夜山仕舞うて戻りがけ、これの親仁が殺されてゐられた故、狩人仲間が連れて来た」

と聞くより、『はつ』と驚く母

「何者の仕業、コレ智殿、殺した奴は何者ぢや、敵を取つて下されなう。コレ親仁殿々々々」

と呼べど叫べどその甲斐も泣くより他の事ぞなき

狩人共口々に

「オ、お袋、悲しかろ。代官所へ願うて詮議して貰はしやれ。ア、笑止々々」

と打ち連れて皆々我が家へ立ち帰る

母は涙の隙ひまよりも勘平が傍へ差し寄つて

「コレ智殿、よもやく、よもやとは思へども合点が行かぬ。なんぼ以前が武士ぢやとて、舅の死目見やしやつたらびつくりもしやる筈。こなた、道で逢うた時金受け取りはさつしやれぬか。親仁殿が何と言はれた、サ言はつしやれ、サ何と。どうも返事はあるまいがの。ない証拠は、コレに」

と勘平が懐へ手を差し入れて引き出だすは

「さつきにちらりと見ておいたこの財布。コレ、この様に血の付いてあるからは、こなたが親仁殿を殺したの」

「ヤ、それは」

「それはとはく、エ、わごりよはなう。隠しても隠されぬ、天道様が明らかな。親仁殿を殺して取つたその金や誰に遣る金ぢや。ム聞こえた。身貧な舅、娘を売つたその金を中で半分くすねておいて、皆遣るまいかと思ふてコリヤ、殺して取つたのぢやなア。今とい

ふ今までも、律儀な人ぢやと思つて騙されたが腹が立つわい。エ、こゝな人でなしめ。あんまり呆れて涙さへ出ぬわいやい。なう愛しや与市兵衛殿、畜生の様な聲とは知らず、どうぞ元の侍にしてやりたいと、年寄つて夜も寝ずに、京三界を駆け歩き珍財を投げうつて世話さしやつたも、かへつてこなたの身の仇となつたるか。飼ひ飼ふ犬に手を喰はるゝと、ようもくこの様に惨たらしう殺された事ぢやまで。コリヤこゝな鬼よ蛇よ、父様を返せ、親仁殿を生けて戻せやい」

と遠慮会釈もあら男の髻たぐひを掴んで引き寄せく叩き付け
「つだく、に切りさいなんだとて、これで何の腹はらが癒よ

と恨みの数々口説き立てかつぱと伏して泣きあたる

身の誤りに勘平も、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰ひ付き天罰と思ひ知つたる折こそあれ

深編笠の侍二人

「早野勘平在宿をし召さるか。原郷右衛門、千崎弥五

郎、御意得たし」

と訪へば

折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇挟んで出で迎ひ

「これはく、御両所共に見苦しきあばら家へ御出で、
忝なし」

と頭を下ぐれば

郷右衛門

「見れば家内に取り込みもあるさうな」

「ア、イヤ、モ些細な内証事。御構ひなくともいざま

づあれへ」

「然らば左様に致さん」

とずつと通り座に着けば

二人が前に両手を付き

「この度、殿の御大事に外れたるは拙者が重々の誤り、
申し開かん詞もなし。何卒、某が科御赦しを蒙り、亡
君の御年忌、諸家中諸共相勤むる様に御両所の御取り
成し、偏へに頼み奉る」

と身をへり下り述べければ

郷右衛門取りあへず

「まづもつてその方、貯へなき浪人の身として多くの
金子御石碑料に調進せられし段、由良助殿甚だ感じ入
られしが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義
をせしその方の金子を以て御石碑料に用ひられんは、
御尊霊の御心にも叶ふまじとあつて、ナソレ、金子は
封の儘相戻さる」

と詞の中より

弥五郎懐中より金取り出だし、勘平が前に差し置けば

『はつ』とばかりに気も顛倒

母は涙と諸共に

「コリヤこゝな悪人面、今といふ今親の罰思ひ知つた
か。ハイ、皆様も聞いて下さりませ。親仁殿が年
寄つて後生の事は思はず、賀のために娘を売り金調へ
て戻らしやるを待ち伏せして、ア、アレあの様に殺し
て取つた金ぢやもの、天道様がなくなば知らず、何で
く御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当
て、下されぬは、神や仏もエ、聞こえませぬ。あの不

孝者、御前方の手に掛けてなぶり殺しにして下され。

わしや腹が立つわいの」

と身を投げ伏して泣きあたる

聞くに驚き兩人刀追取つて、弓手馬手に詰め掛けく

弥五郎声を荒らげ

「ヤイ勘平、非義非道の金取つて身の科の詫びせよと
は言はぬぞよ。わが様な人非人、武士の道は耳に入る
まい。親同然の舅を殺し金を盗んだ重罪人は大身槍の
田楽刺し。拙者が手料理振舞はん」

とはつたと睨めば

郷右衛門

「渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の戒め。舅を殺
し取つたる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が
不忠不義の根性にて調へたる金と推察あつて、突き戻
されたる由良助殿の眼力、ホ、天晴れく。さりながら、
ハア情けなきはこの事世上に流布あつて、塩谷判
官の家来早野勘平非義非道を行ひしといはゞ、汝ばかり
が恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか。こなく、

こなくく、うつけ者めが。勘平、コレサ勘平、御
身はどうしたものだ。左程の事の弁えなき汝にてはな
かりしが、いかなる天魔が魅入りし」

と鋭き眼に涙を浮かめ、事を分け理を責むれば

堪り兼ねて勘平諸肌押し脱ぎ脇差を抜くより早く腹へぐ
つと突き立て

「ム、いづれもの手前面目もなき仕合はせ、拙者が
望み叶はぬ時は切腹と兼ねての覚悟、わが、わが舅を
殺せし事、亡君の御恥辱とあれば一通り申し開かん、
兩人共にまづ、まづ、まづくくサ聞いてたべ。ム
ウ、夜前弥五郎殿の御目に掛かり別れて帰る暗紛れ山
越す猪に出合ひ、二つ玉にて撃ち留め、駆け寄つて探
り見れば猪にはあらで旅人、南無三宝誤つたり。葉は
なきかと懐中を探し見れば財布に入つたるこの金。道
ならぬ事なれども、天より我に与ふる金とすぐに馳せ
行き弥五郎殿にかの金を渡し、立ち帰つて様子を聞け
ば、撃ち止めたるは、撃ち止めたるはわが舅。金は女
房を売つた金、か程までする事なす事、いすかの嘴程

違ふといふも、武運に尽きたる勘平が身の成り行き推量あれ」

と血走る眼に無念の涙

子細を聞くより弥五郎ずんど立ち上り、死骸引き上げ打ち返し、『ムウ、ム』と疵口改め

「郷右衛門殿これ見られよ、鉄砲疵には似たれどもこれは刀で抉つた疵。勘平早まりし」

と言ふに

手負も見てびつくり

母も驚くばかりなり

郷右衛門心付き

「イヤコレ千崎殿、ア、これにて思ひ当つたり。御自分も見られし通り、これへ来る道端に鉄砲受けたる旅人の死骸、立ち寄り見れば斧定九郎。強欲な親九太夫さへ見限つて勘当したる悪党者。身の佇みなき故に山賊すると聞いたるが、疑ひもなく勘平が、舅を討つたは彼奴が業」

「エ、そんなりやアノ親仁殿を殺したは、他の者で

ござりますか。ハア」

『はつ』と母は手負に縫り

「コレ手を合はして押んます。年寄りの愚痴な心から恨み言ふたは皆誤り、堪えて下され勘平殿、必ず死んで下さるな」

と泣き詫ぶれば

顔振り上げ

「只今、母の疑ひもわが悪名も晴れたれば、これを冥途の思ひ出とし、後より追付き舅殿、死出三途を伴はん」

と突込む刀引き廻せば

「ア、暫く。思はずもその方が舅の敵討つたるは未だ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて一功立てたる勘平、息のあるうち郷右衛門が密かに見する物あり」

と懐中より一卷を取り出だし、さらくと押し開き

「この度、亡君の敵高師直を討ち取らんと神文を取り交し一味徒党の連判、かくの如し」

と読みも終らず

苦痛の勘平

「シテその姓名は誰々なるぞや」

「ホ、才徒党の人数は四十五人、汝が心底見届けたれば、その方を差し加え一味の義士四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と懐中の矢立取り出だし姓名を書き記し

「勘平、勘平、血判」

「オ、心得たり」

と腹十文字に掻き切り、臍腑を掴んでしつかと押し

「血判、仕つた」

「ア、コリヤ乗るなく。早野勘平重氏、血判相確かに相済んだぞ」

「チエ、忝なや有難や。わが望み達したり。母人、嘆いて下さるな。舅の最期も女房の奉公も、反古にはならぬこの金、一味徒党の御用金」

と言ふに

母も涙ながら、財布と共に二包み二人が前に差し出だし

「勘平殿の魂の入つたこの財布、智殿ぢやと思ふて敵討の御供に連れてござつて下さりませ」

「オ、成程、尤もなり」

と郷右衛門金取り納め

「思へばくこの金は、縞の財布の紫摩黄金、仏果を得よ」

と言ひければ

「ヤア仏果とは穢らはし、死なぬく。魂魄この土に留まつて敵討の御供する」

と言ふ声も早や四苦八苦

『惜しや不憫』と兩人が浮む涙の玉の緒も切れてはかなくなりにつけり

「ヤア、ヤアく、もう智殿は死なしやつたか。さてもく世の中に、俺が様な因果な者が又と一人あらうか。親仁殿は死なつしやる、頼みに思ふ智を先立ていとし可愛いの娘には生き別れ、年寄つたこの母が一人残つてこれがマア、何と生きておられうぞ。コレ親仁殿、与市兵衛殿、俺も一緒に連れて往て下され」

と取り付いては泣き叫び、また立ち上つて

「コレ智殿、母も共に」

と縋り付いては伏し沈み、あちらでは泣きこちらでは、『わつ』とばかりにどごと伏し、声をはかりに嘆きしは、

目も当てられぬ次第なり

郷右衛門突立ち上がり

「これく老母、嘆かるゝは理りなれども、勘平が最期の様子、大星殿に詳しく語り、入用金手渡しせば満足あらん。首に掛けたるこの金は智と舅の七七日。四十九日や五十両、合はせて百両百ケ日の追善供養、後懇ろに弔はれよ。さらばく」

「おさらば」

と見送る涙

見返る涙

涙の浪の立ち帰る、人もはかなき次第なり

用心

「これはきついわ。下には置かれぬ二階座敷、ソレ灯を灯せ仲居共」

「アイく」

「何と伴内殿、由良助が体御覽じたか」

「九太夫殿、ありやいつそ気違ひでござる。段々貴殿より御内通あつても、あれ程にあらうとは主人師直も存ぜず、拙者に罷り上つて見届け、心得ぬ事あらば早速に知らせよと申し付けましたが、テさて我も偏私も折れましてござる。倅力弥めは何と致しましたな」

「こいつも折節この所へ参り共に放埒。差し合ひくらぬが不思議の一つ。今晚は底の底を探し見んと心巧みを致して参つた。密々にお話し申さう。いざ二階へ」

「まづく」

「しからばかう、お出で」

「蓬萊や、聞かばや伊勢の初便り、こちらの便りを松葉町、夕告げ鳥のしどけなく」

「弥五郎殿、喜多八殿、これが由良助殿の遊び茶屋、

七段目

祇園一力茶屋の段

「花に遊ばゞ祇園あたりの色揃い、東方南方北方西方、弥陀の浄土へびつかりひかく、光輝く色揃い、わいくのわいと」

「誰ぞ頼まう、亭主は居ぬか、亭主々々」

「これは忙しいわく、どいつ様ぢやどなた様、ヤ、これはく斧九太様、御案内とはけうといく」

「イヤ初めての御方を同道申した。きつう取り込みさうに見えるが、一つ上げます座敷があるか」

「ござりますともく。今晚はかの由良大尽の御趣向で名ある色達を掴み込み、下座敷は塞がつてござりますれど、亭座敷が明いてござります」

「そりやまた蜘蛛の巣だらけであらう」

「また悪口を」

「イヤサ、良い年をして女郎の蜘蛛の巣にかゝらまい

「一力と申すのでござる。誰そちよと頼みたい」

「アイく、どなさんぢやえ」

「イヤ、我々は由良助殿に用事あつて参つた。奥へ往て言はうには、『矢間十太郎、千崎弥五郎、竹森喜多八でござる。この間より節々迎ひの人を遣はしますれども、お帰りのない故、三人連れで参りました。ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に、お逢ひなされて下され』ときつと申してくりやれ」

「それは何とも気の毒でござんす。由良さんは三日の方飲み続け、お逢ひなされてから他愛はあるまい。本性はないぞえ」

「テさてマアさう言ふておくりやれ」

「アイく」

「弥五郎殿、お聞きなされたか」

「承つて驚き入りました。初めの程は敵へ聞かする計略と存じましたが、いかう遊びに実が入り過ぎまして合点が参らぬ」

「何とこの喜多八が申した通り、魂が入替つてござ

ろうがの。いつそ一間へ踏み

「ア、イヤく、とくと面談致した上」

「成程、しからばあれにて相待ちませう」

「手の鳴る方へ、手の鳴る方へ」

「捕らまよ、捕らまよ」

「由良鬼待たい、由良鬼待たい」

「捕らまえて酒飲ませ、捕らまえて酒飲ませ。ア、コリヤ捕らまえたわ。サ、酒々、銚子持て、銚子持て」

「イヤコレ由良助殿、矢間十太郎でござる。こりや何となざる」

「南無三、仕舞うた」

「オ、気の毒、何と栄さん、ふし食た様なお侍さん方、お連れさんかいな」

「さあれば、お三人とも恐い顔して」

「イヤコレ女郎達、我々は太星殿に用事あつて参つた。暫く座を立つて貰ひたい」

「そんな事でありそなもの。由良さん、奥へ行くぞえ、

お前も早うお出で。皆さんこれにえ」

「由良助殿、矢間十太郎でござる」

「竹森喜多八でござる」

「千崎弥五郎御意得に参つた」

「御目、覚まされませう」

「オ、これは打ち揃うてようお出でなされた。ガ何と思ふて」

「鎌倉へ打立つ時候は、何時頃でござるな」

「さればこそ。大事の事をお尋ねなれ。かの丹波与作が歌に、江戸三界へ行かんして、ハ、ハ、ハ、ハ、御免候へ、たわい」

「ヤア酒の酔ひに本性違はず」

「性根が付かざれば三人が」

「酒の酔ひを」

「醒ませませうかな」

「ヤレ聊爾なされますな。憚りながら平右衛門め、それへ参つて只一言、申し上げたい儀がござります。

暫く、暫く、暫く、暫くお控へ下さりませう。

御家老様、寺岡平右衛門めでござります。御機嫌の体を押しましていかばかり大悦に存じ奉ります」

「フウ、寺岡平右衛、寺岡平右衛とは、エ、何でえすか。前かど北国へお飛脚に行かれた、足の軽い足軽殿か」

「ネイク、左様でござります。殿様の御切腹を北国にて承りまして、南無三宝と宙を飛んで帰りまする道にて、早や御家も召し上げられ、一家中も散りくと承つた時の無念さ。奉公こそ足軽なれ、御恩は変らぬ御主の仇。おのれ師直めを一討ちと鎌倉へ立ち越え、三ヶ月が間非人となつて付け狙ひましたれども、敵は用心厳しく近寄る事も叶ひませず、所詮どん腹かつさばかんと存じましたが、国元の親の事を思ひ出しまして、すくなく帰りました。ところに天道様のお知らせにや、いづれも様方の一味連判」

「ゴホン、ゴホン、ゴホン」

「石碑、御建立の様子を承りますると、ヤレ嬉しや有

難やと取る物も取り敢えず、あなた方の御旅宿を訪ねひたすら頼み申し上げましたれば、『ム出かいた、うい奴だ。お頭へ願つてやろ』とお詞に縋り、これまで推参りました。ガ師直屋敷の」

「ア、来いよ、来いよ、来いよ。コレ」

「ネイ」

「コレ」

「ネイ」

「コレく」

「ネーイ」

「其元は足軽ではなうて大きな口軽ぢやの。何と太鼓持ちなされぬか。尤もみたくしも、蚤の頭を斧で割つた程無念なども存じて、四五十人一味を拵えて見た、が味な事。よう思つてみれば、仕損じたらこの方の首がころり、仕畢せたら後で切腹。そりやどちらでも死なねばならぬといふは、人參飲んで首括る様なもの。ことに其元は五両に三人扶持の足軽」

「それはあんまり」

「サ、お腹は立てられな、お腹は立てられな、ハ」

「ハ」

「ハ」

「ハ」

「ハ、ハ、ハ」

「ハ、ハ、ハ」

「はつち坊主の報謝米程取つてゐて、命を捨て、敵討せうとは、そりや青海苔貰うた札に太々神樂を打つ様なもの。われら知行ウーイ千五百石、貴様と比べると敵の首を斗升とますで量る程取つても釣り合はぬ。所でやめた」

「エ」

「ナ、聞こえたかえ。とかく浮世は、コレ、コレく、かうした物ぢや、ツ、テン、ツ、テン、チン、チン、ンツンシヤン、などと弾きかけた所はたまらぬ、たまらぬですわいハ、ハ、ハ、ハ」

「これは由良助様のお詞とも覚えませぬ。わづか三人扶持取る拙者めでも千五百石の御自分様でも、繋ぎま

したる命は一つ、御恩に高下はごわりませぬ。サア押

すに押されぬは御家の筋目、殿の御名代もなされます

とお願ひ申すは、憚りとも慮外とも、ほんの猿が人真

似。お草履を掴んでなり共、お荷物をやつと担いでなり共参りませう。どうか御供に召し連れられて、由良助様、御家老様、どうか御供に召し連れられて。これはしたり、寝てござるさうな」

「コレサ平右衛門、あつたら口に風邪ひかすまい。由良助は死人も同然、矢間殿、千崎殿、もう本心は見えましたか。申し合はせた通り計らひませうか」

「いか様、一味連判の者共への見せしめ。イザいづれも」

と立ち寄るを

「ヤレ暫く」

と平右衛門、押し宥めて傍に寄り

「モつくづく思ひ廻しますれば、御主君にお別れなされてより仇を報はんと様々の艱難。木にも萱にも心を

置き、人の誇り無念をばちつと堪えてござるからは、御酒でも無理に参らざばこれまで命も続きますまい。醒めての上の御分別」

と無理に押へて三人を

伴ふ一間は善悪の明りを照らす障子の内、影を隠すや

月の入る

山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力弥、内を透かして正体なき父が寝姿、起こすも人の耳近しと枕元に立ち寄つて、嚮むかに代はる刀の鏗つひ音、鯉口ちやつと打ち鳴らせ

「ムウ、お松、お竹は居らぬか、水を持って来いよ水を持って来いよ。誰れも居らぬと見える。どれく庭へ降りてちと酔ひを醒まして来うか、ウーイ。ヤア力弥か、鯉口の音響かせしは急用あつてか、密かにく」

「只今御台顔世様より急の御飛脚密事の御状」

「他に御口上はなかつたか」

「敵高」

「ア、コリヤ、敵と見へしは群れある鷗かも、時の声と聞こへしは、浦風なりけり高松の。大きな声ぢや、密かにく」

「敵高師直帰国の願ひ叶ひ、近々本国へ罷り帰る。委細の儀は御文との御口上」

「よし。その方は宿へ帰り、夜の中に迎ひの駕籠。

サ、行け、行け」

「ハ、ツ」

『ハツ』とためらふ暇もなく山科さして引返す

「まづ様子気遣ひ」

と状の封じを切る所へ

「大星殿、由良助殿、斧九太夫でござる。御意得ませう」

「ヤこれは久しやく。一年も逢はぬうち、寄つたぞやく。額のその皺伸ばしに御出でか、アノこゝな筵むしろ破りめが」

「イヤ由良助殿、大功は細瑾さいきんを顧みずと申すが、人の誇りも構はず遊里の遊び。大功を立つる基もと、天晴れの

大丈夫、末頼もしう存ずる」

「ホ、ウ、これは堅いわく。石火矢と出かけた。さりとは置かれい〜」

「イヤ由良助殿、とほけまい。まこと貴殿の放埒は」

「敵を討つ術と見えるか」

「おんでもない事」

「ヤ忝ない。四十に余つて色狂ひ。馬鹿者よ氣違ひよと笑はれうかと思ふたに、敵を討つ術とは。九太夫殿嬉し〜」

「スリヤ其元は、主人塩谷の仇を報ずる所存はないか」

「けもない事〜。家国を渡す折から、城を枕に討死と言ふたのは、ありや御台様への追従。時に貴様が、上へ対して朝敵同然とその場をついと立つた。我等は後に、かうしやち張つてゐた。いかいたはけの。所で仕舞ひは付かず、御墓へ参つて切腹と、裏門からこそ〜。今この安樂な楽しみするも貴殿のお陰。昔のよしみは忘れぬ〜。堅みを止めて、コリヤ砕けをれ〜」

「いか様、この九太夫も昔思へば信太の狐。クワイ、化け頭はして一献酌まうか畜生め」

「ハ、」

「ハ、」

「ハ、」

「ハ、」

「ハ、ハ、」

「サ、由良殿、久しぶりだ御盃」

「又頂戴と会所めくのか」

「差しをれ、飲むわ」

「飲みをれ、差すわ」

「丁ど受けをれ着をするわ」

と傍に在りあふ蛸着挟んでずつと

「手を出して足を戴く蛸着。忝ない」

と戴いて喰はんとする

手をちつと捕へ

「コレ由良助殿、明日は主君塩谷判官の御命日。取分け逮夜が大切と申すが、見事その肴貴殿は喰ふか」

「食べるとも〜。但し主君塩谷殿が、蛸になられた

といふ便宜があるか。エ、愚痴な人ではある。こなたや俺が浪人したは判官殿が無分別から。スリヤ恨みこそあれ精進する気、微塵もごあらぬ。御志の肴、賞翫致す」

と何気なもくた〜一口に味はふ風情

邪智深き九太夫も呆れて

「サテこの肴では飲めぬ〜。鶏締めさせ鍋焼きさせん。其元も奥へ御出で。女郎共、歌え〜」

「足元もしどろもどろの浮拍子」

「デレック〜ツ、テン〜。おのれ末社共、めれんになさで置くべきか」

と騒ぎに紛れ入りにける

始終を見届け鷺坂伴内、二階より降り立ち

「九太夫殿、子細とつくと見届け申した。主の命日に精進さへせぬ根性で、敵討存じも寄らず。この通り主人師直へ申し聞け、用心の門を開かせませうかな」

「成程、最早御用心に及ばぬ事」

「コレサまたこ〜に刀を忘れて置きました」

「ほんに誠に。大馬鹿者の証拠、嗜みの魂見ませうかな」

「見ませう〜。イヤナニ九太夫殿、貴殿は鞘の方を

お持ちなされ。拙者は鐙の方を持つて、ヒイフウミツ、の拍子を以て抜きませう。宜し〜」

「宜し〜」

「ヤ、ヒイフウミツ、」

「さて錆びたりな赤鯛」

「猫がおらいで仕合はせでござるわ、ハ、ハ、ハ、」

「いよ〜本心頭はれ御安堵々々々。九太夫が家来、

迎ひの駕籠」

「ハツ」

と答へて持ち出づる

「サア〜伴内殿、お召しなされ」

「まづ御自分は老体、平に〜」

「然らば御免」

と乗り移る

「降りぎ降ろしてやる」

「アレまた悪い事を、アレくくく」

「喧しい。生娘か何ぞの様に。逆縁ながら」

と後より、ちつと抱きしめ抱き降ろし

「何とそもじは御覧じたか」

「アイ、いゝえ」

「見たであろく」

「何ぢややら面白さうな文」

「アノ上から皆読んだか」

「オ、くど」

「ア、身の上の大事とこそはなりにけり」

「ハ、ハ、ハ、何の事ぢやぞいな」

「何の事とはおかる、古いが惚れた。女房になつてた

もらぬか」

「おかんせ、嘘ぢや」

「嘘から出た真でなければ根が遂げぬ。応と言や

く」

「イヤ、言ふまい」

「な―ぜ」

「お前のは嘘から出た真ぢやない。真から出た皆嘘」

「おかる、請け出さう」

「エ、」

「嘘でない証拠に、今宵の中に身請けせう」

「イヤアノ、わしにはな」

「間夫があるなら添はしてやる」

「そりやマアほんかえ」

「侍冥利。三日なり共困うたら、それから勝手次第」

「エ、嬉しうござんす、と言はして置いて、笑おでの」

「イヤ、直ぐに亭主に金渡し、今の間に埒させう。気

遣ひせずと待つてゐや」

「そんなら必ず待つてゐるぞえ」

「金渡しして来る間、どつちへも行きやるな。女房ぢや

ぞ」

「それもたつた三日」

「それ合点」

「エ、忝うござんす」

「どりや、金渡して来うか」

「世にも因果な者ならわしが身は、可愛い男に幾瀬の思ひ、エ、何ぢやいなおかしやんせ。忍び音に鳴く小夜千鳥

「ア、騒ぐはく。さすがは花の祇園町、ア、入相の

鐘は廓の夜明けかな、とはよく言つたもんだ

ハ、ハ、ハ、ハ。ヤそれはさうと妹に逢ひてえもんだが。

ム幸ひの女中、ちよつと物が尋ねたい、この廓へ山崎

辺からかるといふ女が勤めに來てゐる筈だが、お前に

は御存知ねえか」

「エ、何ぢや知らぬが、用があるなら勝手へ往て問う

て下さんせいな」

「サア、さうは思つたが、勝手も何かゴタくと忙し

さうだ。さう言はずと御存知ならどうか教えてくれる」

「エ、知らぬわいな」

「これはしたり、すげねえ女だな。さう言はずとちよつと教えてくれる。コレ、御女中く、ヤア、わりや

妹でねえか」

「ヒエ、兄様か、恥しい所で逢ひました」

と顔を隠せば

「苦しうねえく。関東よりの戻りがけ、母人に逢つ

て詳しく聞いた。お主の為夫の為、よく売られた。で

かいた、でかいたナア」

「さう思ふて下さんすりやわしや嬉しい。したがマア

喜んで下さんせ。思ひがけなう今宵請け出さるゝ筈」

「それは重畳。シテ何人のお世話で」

「サア、お前も御存知の大星由良助様のお世話で」

「何だ、由良助殿に請け出される。それは下地からの

馴染みか」

「なんのいな。この中より二三度酒の相手、夫があら

ば添はしてやる、隙が欲しくば隙やろと、モ結構過ぎ

た身請け」

「さてはその方を早野勘平が女房と」

「イ、エ、知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言ひませう」

「ムウ、すりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存な

ねえに極まつたな」

「イエ、これ兄様、あるぞえ、」

「あるとは何が」

「サア、高うは言はれぬ。コレかう、」

と囁けば

「オ、待て、待て、待て、ソレ、」

「ア、」

「ムウ、すりやその文を確かに見たな」

「残らず読んだその後で、互ひに見合はず顔と顔。それからぢやらつき出してつひ身請けの相談」

「アノ、その文残らず読んだ後で」

「アイナア」

「ムウ、それで聞こえた。妹、とても遁れぬそちが命、身共にくれよ」

と抜き打ちに、はつしと切れば

ちやつと飛び退き

「コレ兄様、わしには何誤り。勘平殿といふ夫もあり、きつと二親あるからはこな様の儘にもなるまい。請け

出されて親夫おやおとに逢はうと思ふがわしや楽しみ。どんな事でも謝らう、赦して下んせ、赦して」

と手を合はすれば

平右衛門、拔身を捨て、

「可愛や妹、わりや何も知らねえな。親与市兵衛殿は六月廿九日の夜、人に切られてお果てなされた」

「ヒエ、それはマア」

「コリヤ、びつくりするなく。まだ後にびつくりの親玉があるわい。われが請け出されて添はうと思ふ勘平はな」

「勘平さんは」

「その勘平は」

「勘平さんは」

「勘平は、勘平で、やつぱり勘平だわい」

「エ、何の事ぢやぞいな。エ、聞こえた、勘平さんにはよい女房さんでも出来たのかえ」

「エ、そんな陽気な事ぢやねえわい」

「そんなら兄さん、勘平さんはえ」

「どうせう」

「道理だ」

「どうせう」

「道理だ」

「どうせう、どうせうぞいなあ」

「尤もだわやい。モ様子話せば長い事、お痛はしいは母者人、言ひ出しては泣き思ひ出しては泣き、娘かるに聞かしたら泣き死にかなするである、必ず言つてくれなどのお頼み。言ふめえとは思へども、とても遁れぬそちが命。サその訳は、忠義一途に凝り固まつた由良助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし。もとより色にはなほ耽けらず、見られた状が一大事、

「オ、兄さん」

「オ、兄だ、平右衛門だ、面おもてを見ろ、」

「コレ兄さん、勘平さんはどうさしやんしたえ」

「チエ、情けねえ、又尋ねるかやい。その勘平はな、友朋輩めんばの面晴めばれに腹を切つて死んだわやい」

「ヤア、それはマアほんかいの。コレのう、」

と取り付いて

「コレ兄さん」

「ム、」

身者しんものの悲しさは、人に勝れた心底を見せねば数しよくには入

れられぬ。聞き分けて命をくれ」

「アイ」

「死んでくれ、妹」

と事を分けたる兄の詞

おかるは始終せき上げく

「便りのないは身の代を役に立てゝの旅立ちか、暇乞ひにも見えそなものと恨んでばかりをりました。勿体ないが父さんは非業の死でもお年の上。勘平殿は三十になるやならず死ぬるのは、さぞ悲しかる口惜しかる、逢ひたかつたであらうのに、なぜ逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬは私が身の因果、何の生きてをりませう。御手に掛からば母さんがお前をお恨みなされましょ。自害したその後で首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。さらばでござる兄さん」

と言ひつゝ刀取り上ぐる

「ヤレ待て暫し」

と止むる人は由良助

『ハッ』と驚く平右衛門

おかるは

「放して殺して」

と焦るを押へて

「ホ、ウ、兄妹共見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を赦すぞ」

「ハ、ア」

「妹はながらへて未来への追善」

「サア、その追善は冥途の供」

ともぎ取る刀を

しつかと持ち添へ

「夫勘平連判に加へしかど、敵一人も討ち取らず、未
来で主君に言訳あるまじ。その言訳はコリヤこゝに」

とぐつと突込む畳の隙間

下には九太夫肩先縫はれて七転八倒

「それ引き出だせ」

の下知より

早く平右衛門、朱に染んだ体をば無二無三に引き摺り出

し

「ヤア九太夫め、テ良い気味」

と引立てゝ目通りへ投げ付くれれば

起き立たせもせず由良助、髻掴んでぐつと引き寄せ

「獅子身中の虫とは己れが事。わが君より高知を頂き、莫大の御恩を着ながら敵師直が犬となつて、ある事ない事よう内通ひろいだな。四十余人の者共は、親に別れ子に離れ一生連れ添ふ女房を君傾城の勤めをさすも亡君の仇を報じたさ。寢覚めにも現にも、御切腹の折からを思ひ出しては無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。取り分け今宵は殿の速夜、口に諸々の不浄を言ふても、慎みに慎みを重ぬる由良助によう魚肉を突き付けたな。否と言はれず応と言はれぬ胸の苦しさ。三代相恩の御主の速夜に喉を通したその時の心、どの様にあらうと思ふ。五体も一度に悩乱し四十四の骨々も砕くる様にあつたわやい。チエ、獄卒め魔王め」

と土に摺り付け捻ぢ付けて無念涙にくれけるが

「ソーレ平右衛門」

「ヘーイ」

「喰らひ酔うたその客に、加茂川でナ」

「いかゞ計らひませう」

「水雑炊を喰らはせい」

「ハ、ア」

「行け」

「ヤ、シテコイナ」

八段目

道行旅路の嫁入

浮世とは誰が言ひ初めて飛鳥川
扶持も知行も瀬と変はり、よるべも浪の下人に、結ぶ塩
谷の誤りは、恋の柳杭加古川の、娘小浪が許婚結納も
取らずそのまゝに、振り捨てられし物思ひ
母の思ひは山科の鴛の力弥を力にて、住家へ押して嫁入
りも、世にありなしの義理遠慮、腰元連れず乗物もやめ
て親子の二人連れ、都の
空に志す

雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添ひて、手先覚へず凍え
坂、薩埵峠に差し掛かり、見返れば富士の煙の空に消え、
行方も知れぬ思ひをば晴らす嫁入の門火ぞと、祝ふて三
保の松原に続く並松街道を、狭しと打つたる行列は誰と
知らねど

羨まし、ア、世が世ならあの如く、一度の晴れと花飾り、
七里の渡し帆を上げて櫓拍子揃えてヤツシツシ、舵取る
音は鈴虫か、いや、きりぎりす鳴くや霜夜と詠みたるは、
小夜更けてこそくれまでと、限りある船急がんと母が走
れば、娘も走り空の、霰に笠覆ひ船路の友の後や先、
庄野亀山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、駅路の鈴の
鈴鹿越え、間の土山雨が降る、水口の端に言ひはやす、
石部石場で大石や、小石拾ふて我が夫と撫でつさすりつ
手に据えて、やがて大津や三井寺の、麓を越えて山科へ
程なき里へ

伊達を駿河の府中過ぎ、城下過ぐれば気散じに、母の心
もいそぐと

二世の盃済んで後、閨の睦言私言、親知らず子知らず
と鶯の細道もつれ合ひ、男松の肌にひつたりと締めて固
めし新枕、女夫が中の若緑、抱いて寝松の千代かけて、
変るまいぞの睦言は嬉しからふとほのめけば

アノ母様の差し合ひを脇へこかして鞠子川、宇津の山辺
の現にも、夢にも早う大井川、水の流れと人心、都の
花に比ぶれば、日蔭の紅葉色づいて、つひ秋が来てさ男
鹿の、妻故ならば朝夕に辛苦するものなんのその、この
手柏のうら若き一人が中にやゝ産んで、ねんくこ
ろんや、ねんねが守はどこへ往た、どことは知れたそ
の人に、逢ふて恨みをなんとまあ、どう言ふてよからう
と辛気島田の憂さ晴らし

わが身の上をかくとだに、人白須賀の橋越えて行けば吉
田や赤坂の、招く女の声揃え

縁を結ば、清水寺へ参らんせ、音羽の滝にさんぶりに
毎日さう言ふて拝まんせ、さうぢやいな、紫色雁高我開

九段目

雪転しの段

急ぎ行く

風雅でもなく洒落でなく、しやう事なしの山科に由良助
が佐住居、祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し朝戻り、
榎間仲居に送られて酒がほたえる雪転し、雪はこけいで
雪こかされ。仁体捨てし遊びなり

「旦那、申し旦那、お座敷の景ようござります。お庭
の藪に雪持つてとなつたところ、とんと絵に描いた通
りけうといじやないかい、ノウお品」

「サイナア、この景を見て外へはどつちへも行きたく
はござりますまいがな」

「朝夕に見ればこそあれ住吉の、岸の向ひの淡路島山
といふ事知らぬか。自慢の庭でも家の酒は飲めぬく。
エ、通らぬ奴く。サアく奥へく、奥はどこに
ぞ、お客がある」

と先に立つて飛石の、詞もしどろ足取りもしどろに見ゆる酒機嫌

「お戻りさうな」

と女房のお石が軽う汲んで出る、茶屋の茶よりも気の端香、『お寒からう』と愠気せぬ詞の塩茶酔ひ醒まし一口飲んで後打ち明け

「ア、奥、無粋なぞや。折角面白う酔うた醒ませとは、ア、ア、降つたる雪かな。いかに余所のわろたちさがぞ愠気とや見給ふらん。それ雪は打綿に似て飛んで中入りとなる。奥は母様といへばどつと世帯じむといへり。加賀の二布へお見舞ひの遅いは御用捨、伊勢海老と盃、穴の稲荷の玉垣は朱うなければ信がさめるといふ様なものかい。オイこれくこぶら返りぢや、足の大指折つたく。おつとよし。つひでにかうじや」

と足先で

「ア、これ、ほたへさしやんすな、嗜ましやんせ。酒が過ぎると他愛がない。ほんに世話でござろうの」

と物柔らかにあいしらふ
力弥心得奥より立ち出で

「申し、申し母人、親父様は御寝なつたか。これ上げられい」

と差し出だす、親子が所作を塗り分けても下地は同じ桐枕

「オ、オ、」

おうは夢現

「イヤモウ、皆往にやれ」

「ハイ、ハイ、そんならば旦那へよろしう。若旦那、ちと御出でを」

目遣ひで去に際悪う帰りける

声聞えぬまで行き過ごさせ、由良助枕を上げ

「ヤア力弥、遊興に事寄せ丸めたこの雪、所存あつての事ぢや。が何と心得たぞ」

「ハ、雪と申すものは降る時には少しの風にも散り、軽い身でござりませうとも、あの如く一致して丸まつた時は、峰の吹雪に岩をも砕く大石同然、重い忠義、

「頼みませうく」

と言ふ声に

襷外して飛んで出る、昔の奏者今のりん

「どうれ」

と言ふもつかうどなる

「ハツ、大星由良助様お宅はこれかな。左様ならば加古川本蔵が女房戸無瀬でござります。まことにその後には打ち絶えました。ちとお目に掛かりたい様子につき、遙々訪ね参りましたと伝へられて下されよ」

と言ひ入れさせて表の方

「乗物これへ」

と昇き寄せさせ

「娘、こゝへ」

と呼び出せば

谷の戸あけて鶯の梅見付けたる頬笑顔、目深に着たる帽子の内

「アノ、力弥様のお屋敷はもうこゝかえ。わしや恥かし」

山科閑居の段

引き立て入りにける

人の心の奥深き山科の隠れ家を、訪ねてこゝに来る人は加古川本蔵行国が女房戸無瀬、道の案内の乗物をかたへに待たせた、一人、刀脇差さすが実に行儀乱さず庵の戸

となまめかし

取り散らす物片付けて

「まづお通りなされませ」

と下女が伝へる口上に

「駕籠の者、皆帰れ。サ、サ、ご案内頼みます」

と言ふも

いそぐ娘の小浪、母に付き添ひ座に直れば

お石しとやかに出で迎ひ

「これはく、お二方共ようぞやお出で。とくよりお目にも掛かる筈。お聞き及びの今の身の上、お尋ねに預りお恥づかしい」

「あの改まつたお詞。お目に掛かるは今日初めなれど先だつてご息力弥殿に娘小浪を許婚致したからは、お前なり私なり、姫、同士、ご遠慮に及ばぬ事」

「これはく痛み入る御挨拶。ことに御用繁い本蔵様の奥方、寒空といひ思ひがけない御上京。戸無瀬様はともあれ小浪御寮、さぞ都珍しからう。祇園、清水、智恩院、大仏様御覧じたか。金閣寺拝見あらばよいつ

てがあるぞえ」

と心置きなき挨拶に

たゞ、『あい、あい』も口の内、帽子まばゆき風情なり

戸無瀬は行儀改めて

「今日参る事余の儀にあらず。これなる娘小浪、許婚致して後、御主人塩谷殿不慮の儀につき、由良助様、力弥殿、御在所も定かならず。移り変わるは世の習ひ、変らぬは親心、とやかくと聞き合はせ。この山科にござる由承りました故、この方にも時分の娘、早うお渡し申したさ。近頃押し付けがましいが、夫も参る筈なれど出仕に隙のない身の上。この二腰は夫が魂。これを差せばすなはち夫本蔵が名代と私が役の二人前。」

由良助様にも御意得まし祝言させて落ち着きたい。幸ひ今日は日柄もよし、御用意なされ下さりませ」
と相述ぶる

「これは思ひも奇らぬ仰せ。折悪う夫由良助は他行。さりながらもし宿におりましてお目にかゝり申さうならば、『御親切の段千万忝のう存じます。許婚致し

るまいものでもない」

「ムウ、こりや聞き所お石様。心と心が釣り合はぬとおつしやるは、どの心ぢや、サ、サ、サ、それ聞かう」

「サイノウ、主人塩谷判官様の御生害、御短慮とはいひながら正直を本とする御心より起りし事。それにひきかへ師直に金銀を以てこびへつらふ追従、武士の禄を取る本蔵殿と、二君に仕へぬ由良助が大事の子に釣り合はぬ女房は持たされぬ」

と聞きもあへず、膝立て直し

「へつらひ武士とは誰が事。様子によつては聞き捨てられぬ。ム、ム、ムウ、ム、ム、がマアそこを赦すが娘の可愛さ。夫に負けるは女房の常。祝言あらうがあるまいが、許婚あるからは天下晴れての力弥が女房」

「面白い。女房ならば夫が去る。力弥に代つてこの母が去つた。去つた」

と言ひ放し、心隔ての唐紙をはたと引き立て入りにける娘は『わつ』と泣き出だし

「折角思ひ思はれて、許婚した力弥様に逢はせてやる

と聞いて『はつ』とは思ひながら

「アノマアお石様のおつしやる事。いかに卑下なされうとて本蔵と由良助様、身上が釣合はぬとな。そんならば申しませう。手前の主人は小身故、家老を勤むる本蔵は五百石。塩谷殿は大名、御家老の由良助様は

千五百石。すりや本蔵が知行とは千石違ふを合点で許婚はなされぬか。ただ今は御浪人。本蔵が知行とは皆違うてから五百石」

「イヤ、そのお詞違ひます。五百石はさて置き、一

万石違うても心と心が釣り合へば大身の娘でも嫁に取

とのお詞を頼りに思ふて来たものを、姑御の胸欲に去られる覚えわたしやない。母様どうぞ詫言して祝言させて下さりませ」

と縋り嘆けば

母親は、娘の顔をつくづくと打ち眺めく

「親の欲目か知らねども、ほんにそなたの器量なら十人並にもまさつた娘。よい智をがなと詮議して許婚した力弥殿。訪ねて来た甲斐もなう、智にも知らさず去つたとは、義理にも言はれぬお石殿。姑去りは心得ぬ。ムウ、さては浪人の身のよるべなう筋目を言ひ立て、有徳な町人の智になつて義理も法も忘れたな。ノウ小浪、今言ふ通りの男の性根、去つたといふを面当て、欲しがる所は山々。他へ嫁入りする気はないか。大事のところ泣かずともしつかりと返事しや。コレどうぢや、どうぢや」

と尋ぬる親の気は張弓

「アノ母様の胸欲な事おつしやります。国を出る折父様のおつしやつたは、『浪人しても大星力弥、行儀とい

ひ器量といひ幸せな智を取つた。貞女両夫に見えず。たとへ夫に別れてもまたの殿御を設けなよ。主ある女の不義同然、必ずく寝覚めにも殿御大事を忘るゝな。由良助夫婦の衆へ孝行尽くし夫婦仲、睦じいとてあじやらにも、愷気ばしして去らるゝな。案せうかとして隠さずと懐妊になつたら早速に知らせてくれ』とおつしやつたを、わたしやよう覚えてゐる。去られて往んで父様に苦に苦を掛けてどう言ふてどう言訳があらうとも、力弥様より他に余の殿御、わしやいや、いやく

く

と一筋に恋を立て抜く心根を

聞くに堪えかね母親の、涙一途に突き詰めし覚悟の刀抜き放せば

「母様これは何事」

と押し留められて

顔を上げ

「何事とはく曲がないわいな。今もそなたが言ふ通り一時も早う祝言させ初孫の顔見たいと、娘に甘いは

父の習ひ。喜んでござる中へまだ祝言もせぬ先に去られて戻りましたとてどう連れて往なれうぞ。と言ふて

先に合点せにや仕様もやうもないわいの。ことにそなたは先妻の子、わしとは生さぬ仲ぢや故、およそにしたかと思はれては、どうも生きてはゐられぬ義理。この通りを死んだ後で父御へ言訳したもや」

「アノ勿体ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死すべき筈。生きてお世話になる上に苦を見せまする不孝者。母様の手に掛けて私を殺して下さいませ。去られても殿御の家、こゝで死ぬれば本望ぢや、早う殺して下さいませ」

「オ、よう言やつた、でかしやつた、でかしやつたくくくくくくく、でかしやつたよのう。そなたばかり殺しはせぬ。この母も三途の供、そなたをおれが手に掛けて母も追付け後から行く。覚悟はよいか」と立派にも涙とどめて立ちかゝり

「コレ小浪、ア、アレ、あれを聞きや。表に虚無僧の尺八、鶴の巢籠り。鳥類でさへ子を思ふに、科もない

子を手に掛けるは因果と因果の寄り合ひ」

と思へば足も立ち兼ねて、震ふ拳を漸々に振り上げる刃の下

尋常に座を占め、手を合はせ

「南無阿弥陀仏」

と唱ふる中より

「御無用」

と声掛けられて

思はずも、たるみし拳尺八も共に、ひつそと静まりしが「オ、そふぢや。今『御無用』と留めたは虚無僧、虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で、無用といふに気後れし、未練など笑はれな。娘、覚悟はよいかや」とまた振り上げる

また吹き出だす、とたんの拍子に

「御無用」

「ム、また御無用と留めたは、修行者の手の内か、振り上げたこの手の内か」

「イヤ、お刀の手の内御無用。倅力弥に祝言させう」

「エ、さういふ声はお石様。そりや真実か真か」
と尋ぬる襖の内よりも

「あひに相生の松こそ目出たかりけれ」
と祝儀の小謡白木の小四方、目八分に携へ出で

「義理ある仲の一人娘、殺さうとまで思ひ詰めた戸無
瀬様の心底、小浪殿の貞女。志がいとほしき、させに
くい祝言さす。がその代り、世の常ならぬ嫁の盃、受
け取るはこの三方、御用意あらば」

とさし置けば

少しは心休まりて、抜いたる刀鞘に納め

「世の常ならぬ盃とは引出物の御所望ならん。この二
腰は夫が重代。刀は正宗、差添は浪の平行安。家にも
身にも代へぬ重宝。これを引出」

と皆まで言はさず

「イヤコレ、浪人と侮つて価の高い二腰。まさかの
時に売り払へと言はぬばかりの賀引出。御所望申すは
これではない」

「ム、そんなら何が御所望ぞ」

「この三方へは加古川本蔵殿のお首をのせて貰ひた
い」

「エ、ヒエ、そりや又なせな」

「サイノ、御主人塩谷判官様、高師直にお恨みあつて
鎌倉殿で一刀に斬り掛け給ふ。その時こなたの夫加古
川本蔵、その座にあつて抱き留め殿を支へたばかり
に御本望も遂げられず、敵は漸々薄傷ばかり、殿はや
みく御切腹。口へこそ出し給はね、その時の御無念
は、本蔵殿に憎しみが掛かるまいか、あるまいか。家
来の身としてその加古川が娘、安閑と女房に持つ様な
力弥ぢやと思ふての祝言ならば、コレこの三方へ本蔵
殿の白髪首、いやとあればどなたでも、首を並ぶる尉
と嫗、それ見た上で盃させう。サ、ハ、ハ、嫌か応かの
返答を」

と鋭き詞の理屈詰め、親子は『はつ』とさし俯き途方に
暮れし折柄に

「加古川本蔵が首進上申す。お受け取りなされよ」

と表に控へし虚無僧の、笠脱ぎ捨て、しづくと内へ這
入るは

「ヤア、お前は父様」

「本蔵殿、こゝはどうして、この形はマ合点がいかぬ、
こりやどうぢや」

と咎むる女房

「ヤアざわくと見苦しい。始終の子細皆聞いた。そ
ちたちに知らさず、こゝへ来た様子は追つて、サまず
黙れ。イヤナニ、其元が由良助殿御内証、ア、ア、ハ、ハ、
お石殿よな。今日の仕儀かくあらんと思ひ、妻子にも
知らせず様子を伺ふ加古川本蔵、案に違はず拙者が首
賀引出に欲しいとな。ムフ、ハ、ハ、ムフ、ハ、ハ、ハ、ハ、
いやはやそりや侍の言ふ事さ。主人の仇を報はんとい
ふ所存もなく、遊興に耽り大酒に性根を乱し、放埒な
る身持ち、日本一の阿呆の鑑。蛙の子は蛙になる。親
に劣らぬ力弥めが大だはけだわい。狼狽武士のなまく
ら鋼、この本蔵が首は切れぬ。馬鹿つくすな」

と踏み碎く

「割れ三方の扶持放れ、こつちから賀にやとらぬ。ヤ
まちよございな女め」
と言はせも果てず

「ヤア過言なぞ本蔵殿、浪人の錆刀、切れるか切れ
ぬか塩梅見せう。不肖ながら由良助が女房、望む相手
ぢや、サア勝負、勝負々々」

と裾引き上げ、長押に掛けたる槍追取り突掛からんずそ
の気色

「これは短気な、マア待つて」

と留め隔つる女房娘

「コリヤ、邪魔ひろぐな」
と荒けなく右と左へ引退くる、間もあらせず突掛くる、
槍のしほくび引掴み、もちつて払へば身を背向け、もろ
足縫はんと閃めかす、刃背を蹴つて蹴上ぐれば、拳放れ
て取り落とす

『槍奪はれじ』と走り寄る

腰際帯際引掴み、どうど打ち付け動かせず、膝に引敷き
豪気の本蔵

敷かれてお石が無念の齒がみ

親子はハア／＼危ぶむ中へ

駆け出づる大星力弥、捨てたる槍を取る手も見せず本蔵が右手の助、左手へ通れと突き通す

『うん』とばかりにかつぱと伏す

「コハ情けなや」

と母娘、取り付き嘆くに

目も掛けず、止め刺さんと取り直す

「ヤレ待て力弥、早まるな」

と槍引き留めて由良助、手負に向ひ

「一別以来、珍し、本蔵殿、御計略の念願届き、智力が手に掛かつてさぞ本望でござらうの」

と星をさいたる大星が

詞に本蔵目を見聞き

「ムウ、主人の鬱憤を晴らさんとこの程の心遣ひ、遊所の出合に気をゆるませ徒党、徒党の人数は揃ひつらん。思へば貴殿の身の上はこの本蔵が身にあるべき筈。当春鶴が岡造宮の砌、主人桃井若狭之助、高師直に

恥しめられもつてのほか憤り。某を密かに召され、

まつかう／＼の物語。明日御殿にて出くはせ一刀に討ち留めるとのコレ思ひ詰めたる御顔色。止めても止

まらぬ若気の短慮。小身故に師直に、賄賂薄きを根に

持つて恥しめたと知つたる故、主人に知らせず不相応の金銀衣服台の物、師直へ持参して心に染まぬ諂

ひもコレ主人の大事と存ずるから。賄賂負せあつちから謝つて出た故に、斬るに斬られぬ拍子抜け。主人

が恨みもさらりと晴れ、相手代つて塩谷殿の難儀となりしはすなはちその日。相手死せずば切腹にも及ぶま

じと、抱き止めたは思ひ過ごした本蔵が一生の誤りは娘が難儀と、白髪のコレこの首、智殿に進ぜたさ。女

房娘を先へ上し、媚び諂ひしを身の科にお暇を願うてな、道を変へてそち達より二日前に京着。若い折の遊

芸が役にたつた四日の内、こなたの所存を見抜いた本蔵、手に掛ければ恨みを晴れ、約束の通りこの娘、力

弥に添はせて下さらば未来永劫御恩は忘れぬ。コレ、手を合はして頼み入る。忠義にならでは捨てぬ命、子

故に捨つる親心。コレ／＼／＼推量あれ由良殿」

と言ふも涙にむせ返れば

妻や娘はあるにもあられず

「ほんにかうとは露知らず、死に遅れたばつかりに、

お命捨つるはあんまりな。冥加の程が恐しい。赦し

て下され父上」

とかつぱと伏して泣き叫ぶ

親子が心思ひ遣り、大星親子三人も共にしをれてゐたり

しが

「ヤア／＼本蔵殿、君子はその罪を憎んでその人を憎まずといへば、縁は縁恨みは恨みと格別の沙汰もあるべきにとさぞ恨みに思はれん。が所詮この世を去る人、底意を明けて見せ申さん」

と未然を察して奥庭の障子さらりと引き開くれば

雪をつかねて石塔の五輪の形を二つまで造り立てしは大

星がなり行く果てを頭はせり

戸無瀬はさかしく

「オ、御主人の仇を討つて後、二君に仕へず消ゆると

いふお心のアレあの雪、力弥殿もその心で娘を去つたの胴慾は、御不憫余つてお石様、恨んだがわしや悲し

い」

「ア、コレ／＼／＼戸無瀬様のおつしやる事わいの、

玉椿の八千代までもと祝はれず、後家になる嫁取つ

たがこのような目出たい悲しい事はない。コレ／＼

／＼かういふ事がいやきにな、酷う辛う言ふたのが、

さぞ憎かつたでござんしよな」

「イ、エイナ、わたしこそ腹立つまゝ、町人の聲にな

つて義理も法も忘れたかと言ふたのが恥づかしいやら

悲しいやら、どうも顔が上げられぬわいな、お石様」

「ア、これ／＼／＼戸無瀬様、氏も器量も優れた子、

何としてこの様に果報拙い生れや」

と声も涙にせき上ぐる

本蔵熱き涙をおさへ

「ハア嬉しや本望や。呉王を諫めて誅せられ、辱か

しめを笑ひし呉子胥が忠義はとるに足らず。忠臣の鑑

とは唐土の予讓、日本の大星。昔より今に至るまで

これや尺八煩惱の枕並ぶる追善供養、閨の契りは一夜切り、心残して立ち出づる

十段目

天河屋の段

出で入るや、小船大船入り交り、荷揚げ荷積みのはしき

堺湊の夜は更けて、月の曇りに影隠す隣家も寝入る亥の刻過ぎ、空に瞬く天河のこの家を目かけ捕手の人数

十手早縄腰提灯、灯影透かして窺ひく、犬とおぼしき家来を招き、耳打ちすれば

さし心得、門の戸せはしく打ち叩く

「誰ぢや〜」

も及び腰

「ア、イヤ、宵に来た大船の船頭でござる。船賃の算用違うた、ちよつと開けて下され」

「ハテ仰山な、僅かな事である、明日来たく〜」

「ア、イヤ、今夜浮ける船、仕切つて貰はにや出られませぬ」

と言ふも声高

『近所の聞こえ』と義平は立ち出で、何心なく門の戸を明けるとそのまゝ

「捕つたく、動くな上意」

と追取り巻く

「コハ何故」

と四方八方、眼配れば

捕手の兩人

「ヤア何故とは横道者、おのれ塩谷判官が家来大星由良助に頼まれ、武器馬具を買ひ調へ大廻しにて鎌倉へ遣はす条、召し捕り拷問せよとの御上意。遁れぬ所ぢや、腕廻せ」

「これは思ひも寄らぬお咎め、左様の覚え聊かなし。定めしそれは人違え」

と言はせもたてず

「ヤア抜かすまい。争はれぬ証拠あり。ソレ家来共」

『はつ』と心得持ち来たるは、宵に積んだる莫座荷の長持

見るより義平は心も空

「ソレ、動かすな」

と四方の十手、その間に荷物を切り解き、長持明けんとする所を

飛びかゝつて下部を蹴退け

「ヤア鈍忽千万、この長持の内に入れ置いたはさる大名の奥方よりお詛えのお手道具、お具足櫃の笑ひ本、笑ひ道具の注文までその名を記し置いたれば、明けさしては歴々のお家のお名が出る事。ご覧あつてはいづれもの御身の上にもかゝりませうぞ」

「ヤアいよ〜胡乱者、なか〜大抵では白状致すまい。ソレ申し合はせた通り」

「ハツ、合点でござる」

と一間へ駆け入り

一子由松を引立て出で

「サア義平、長持の内はともあれ、塩谷浪人一統に固まり、師直を討ち取る密事の段々、おのれよつく知つらん。有様に言へばよし、言はぬと忽ち倅が身の上、

コリヤこれを見よ」

と抜き刀、幼き喉に差し付けられ

『はつ』と思へど色も変ぜず

「ハ、ハ、ハ、女童を責める様に、人質取つての御詮議か。いかに可愛い子なればとて、子にほだされ存ぜぬ事を『存じた』とは得申さぬ。知らぬと言ふから金輪奈落、地獄の責に逢ふとても、一言半句も申されぬわ」
「デモ胴骨の太い奴、管槍、鉄砲、鎖帷子、四十六本の印まで、調へやつたる汝が知らぬと言つて言はしておかうか。白状せぬと一寸試し、一分刻みに刻むが何と」

「ム、面白い、刻まれう。武具は勿論、公家武家の冠烏帽子、下女小者が藁沓まで、買ひ調べて売るが商人。それ不思議とて御詮議あらば、日本に人種はあるまい。一寸試しも三寸縄も、商売故に取らるゝ命、惜しいとは思はぬ。倅も目の前で突けくく。摂津河泉の場荷積荷、出船入船何百艘、湊堺の町人の男の中の男一匹。少しは知られた顔面、天河屋の義平はへ、男で

く。案じる胸も休まらぬ古朋輩の者共へ安堵させん為、せまじき事とは存じながら右の仕合せ。兎忽の段は真平々々。百万騎の強敵は防ぐとも、左程に性根は据はらぬもの。人ある中にも人なしと申せども、町家の中にもあればあるもの。義平殿、静謐の世には賢者も頭はれず、エ、惜しいかな、悔しいかな。亡君御存生の折ならば、一方の旗大将、一国の政道をお預け申したとて惜しからぬ御器量、武骨の段真平」
と畳に頭を摺り付ける

「ヤレそれは御迷惑、お手上げられて下さりませ。私は元軽い者、お国の御用承つてより経上つたこの身代。判官様の様子承つて共に無念、何卒この恥辱、雪ぎ様はないかと、町人づれにも及ばぬ心、いろく碎くその折柄、思ひがけない由良助様のお頼み、向ふ見ずにも只一筋、御恩報じの一心にお力を付けるばかり。身の程知らぬこの義平が志もお執り成し」

と厚き詞に

人々も、思はず涙催して奥齒嚙み割るばかりなり

「いやく」

と長持の上にとつかと大磐石、いつかな動かぬ面魂

「デモ強情な不敵者。この上は早やこの倅、只一打ち」と構える切先

「ヤレ待て暫し」

と長持の内より呼ぶ声

『コハ如何に』と思はず飛び退き身構ゆれば

悠々として立ち出づる大星由良助良金

義平はびつくり

捕手の面々、十手捕縄打ち捨て、遙か下つて座を占むる

威儀を正して由良助、義平に向ひ手をつかへ

「テサテ驚き入つたる御心底。泥中の蓮、砂の中の黄金の貴公と見込んで頼んだ一大事。この由良助は微塵聊かお疑ひ申さねども、馴染み近付きなき四十余人の中には、天河屋の義平は生れながらの町人、今にも捕はれ詮議に会はゞ如何あらん、何とか言はん。ことに寵愛の一子もあれば子に迷ふは親心と、評議まち

やゝあつて由良助、『それ』と矢間に目くばせに

『はつ』と心得重太郎、何か様子は白地の扇、白台代はりに一包み、乗せてさし置く義平の前

「イヤナニ御亭主、今晚鎌倉へ出立仕ればいつまた逢ふ事もなき我等。重々の御厚意に礼は詞に述べ難し。せめて寸志はこの一品。些少なから御受納下さらば、

この上の悦びなし」

といと慇懃に辞儀すれば

義平は色を変へ

「ア、イヤ申し御家老様、イヤサ大星由良助様、礼物受ける心にて、この命懸けのお世話申さぬ。町人と見侮り、小判の耳で面張るのか、たゞし性根を見違えたか。エ、穢らはしいこの進物、お返し申す」

と投げ出だせば

包み解けて内よりばらり、頭はれ出でしは櫛笄、切り髪包みし紙の端

「どうやら覚えある手蹟は、ヤ、コリヤコレ女房に与へし去り状。どうしたこと」

と不審立ち、固唾を呑んであたりける

「ホ、不審はさこそ義平殿、我等の宿願叶へさせんと秘密を守るその為に、御内証までも離縁の誠心、ホ、天晴れ見上げし義心の程。また御内証お園殿、夫に立つる操は一つ、再び二夫に仕へずとおしげも涙切り髪に、浮世を捨てし健気の心、か程の義心貞心を見極めし上は何をかは言はん、今は離別に及ぶまじ。ソレお園殿、こなたへ」

と思ひがけなき大星の

声に隠れし妻お園、勝手を走り転び出づれば

「あれ母さんぢや」

と由松が『嬉しいわいの』と取り纏る

母も引き寄せ頬擦りし、咽びながらも口説き言

「ほんに思へば女子程因果なものがあろかいな。夫の受けし殿様の御恩は女房も同じ事、これが男であるならば共に御恩に報えるもの。妹背交はした女夫でも女子と生れし悲しさは、露一言の打ち明けさへ泣くに泣かれぬ浅間しや」

と夫の膝に打ち伏せば

義平も『はつ』と胸迫り、声を忍びの泣く涙

やゝあつて由良助

「イヤナニ御亭主、今宵出立の上は本望遂ぐるも百日とは過ごすまじ。その髪の延びる間もおよそ百日。敵討の知らせあらば再び生きる夫婦の道、その時に櫛笄、それ、その切り髪を添に入れ、目出度う迎える笄、鬻の三國一の祝言には、無用の去り状破るが仲立ち、

由良助

と引き裂く三行半分は身が預かると懐に、蓋も実もある大星が詞ぞ情け涙なる

「早や出立」

と由良助

「兼ねて敵討と存ずれば、敵中へ入り込む時、貴殿の家の名天河屋を直ぐに敵討の合詞、天とかけなば河と答へ、四十余人の者共が天よ河よと申しなば、貴公も敵討に御出でも同然。早やお暇と出立立づる

末世に天を山といふ由良助が孫呉の術、忠臣蔵とも言ひ

はやす娑婆の詞の定めなき、別れく出て出て行く

十一段目

花水橋引揚の段

柔よく剛を制し弱よく強を制するとは、張良に石公が伝へし秘法なり

塩谷判官高定の家臣大星由良助これを守つて、一味の義士一子力弥、原郷右衛門、千崎、矢間、小寺、中村、不破、竹森、大鷲文吾、片山そのほか四十余騎、着たる羽織の合印

いろはにほへど多ひもせず、艱難辛苦の一年も、首尾よく本望成就に今ぞ晴れゆく富士の嶺、朝日に高く照り映えて、解くるは胸の仇し雲

由良助声あつて

「いかに方々、味方に幸ひ討死もなけれど手疵の者もあるべければ、共々勞り助け合ひ、菩提所まで引き揚ぐべし。今一息ぞ気をゆるされな」

と勞り勵まし行く折柄

駒を早めて一騎駆け、走り来たつて

「ヤア／＼待たれよ。われは桃井若狭助、委細只今聞
くよりも御祝詞申しに駆け付け申した。ハア天晴れ
各々の忠心義心、首尾よく本望達せられ、その喜びや
如何ばかり。泉下に在す判官殿もさぞ御満悦の事やら
ん。大星殿おめでたう存ずる」

と言ふも眼に浮く露涙、心誠を頭はせり

由良助一礼し

「ハ、ア、こはありがたき桃井様。今は何をか申すべ
き。たゞ寂々の二字とのみ」

「ウムさこそあるべし。この上は早まらず上の裁きを
心静かに菩提所にて待ち給へ。時移らば師直の家臣追
討かけんもはかり難し。程よき時刻の移るまで某
こゝに道塞ぎ、よし師直方来たるとも一步もこゝは通
すまじ。早や疾く行かれよ方々」

と忠に報ゆる義の声に

大星始め一味の義士

「これはありがたし忝なし。御好意受ける今の身のや

がて御礼は冥途より。さらば」

「さらば」

と一礼し、思ひ交々一筋の道を別れて右左

見送る若狭

見返る義士

宿世の縁や忠臣の鑑ぞ代々に曇りなき、今に残る仮名手
本、名は千歳にいちじるき

光明寺焼香の段

柔よく剛を制し弱よく強を制するとは、張良に石公が
伝へし秘法なり

塩谷判官高定の家臣大星由良助これを守つて、一味の勇
士四十余騎、着たる羽織の合印いろはにはへど立ち並
ぶ

「いかに方々、この首一つ見んために、妻を捨て子に
別れ、千辛万苦の甲斐あつて、亡君にもさぞ御満足。

今日はいかなる吉日ぞや。年来の望みを達せし」

と一同『わつ』と嬉し泣き、理り至つて道理なり

由良助懷中より九寸五分取り出だし、師直が首諸共御墓
に供へ奉り

「恐れがら亡君尊靈へ申し上げ奉る。さんぬる御切腹
の折柄より御無念を晴し奉らんと、昼夜忘るゝ隙もな
く、わざと遊興に日を送り、諸士の剛健を試し見る内、
不忠の輩は皆逃げ失せ、僅かに残る四十余人。心を
一致に今日只今御形見にと下されしこの短刀にて師直
が首掻き切り、御位牌へ手向け奉る。草葉の蔭にて御
受け取り下さるべし。イザ方々、一人づゝ御焼香」

「ア、イヤ、先づ惣大将の御自分様より」

「ア、イヤ／＼、さあらばまづ拙者より先へ、矢間十
太郎殿、イザ御焼香なされ」

「それは又存じも寄らず、いづれもの手前御鬘負は却
つて迷惑」

「ナニサ鬘負にあらず。四十余人の衆が師直が首取ら
んと、一身を擲つ中に貴殿一人。柴部屋より見出し
生捕りになされたは、よく／＼主君尊靈の御心に叶ひ

し矢間殿、御羨しう存ずる。なんといづれも、左様に
てはござるまいか」

「いかにも、御尤もに存じます」

「それはなんとも」

「テさて、時刻が延びる。イザ疾く／＼」

「ハ、ア、然らば御免」

と立ち上がり、一の焼香是非なく／＼

「二番目は由良助殿、イザ御立ち」

と勸むれば

「ア、イヤ、まだ他に焼香の致す人あり」

「そりや何者誰人」

と問へば

大星懷中より、碁盤縞の財布取り出だし

「これが忠臣二番目の焼香、早野勘平がなれの果て。

その身は不義の誤りから、一味同心も叶はず。せめて
石碑の連名にと女房売つて金調へ、その金故に冴は打
たれ、金は戻され、詮方なく腹切つて相果てしその時
の勘平が心、さぞ無念にあつたである。金戻したは由

良助が誤り、ハア不憫な最期を遂げさせしと片時忘れ
ず肌離さず。イヤナニ力弥、この財布、平右衛門に渡
せよ」

列座の諸士も賞美の詞、末世末代伝ふる義臣、これも偏
へに君が代の、久しき例竹の葉の栄えを、こゝに書き
残す

と詞に

『はつ』と子息力弥、平右衛門の手に渡せば

「これはさて勿体ない。御家老様より平にく」

「コレ平右衛門、妹智のその方にと父上の御氣遣ひな
るぞ」

「コレサ平右衛門、思し召しを無下にせまい。イザ仕
れ」

と諸士の声々

「ハ、ア、ハツ」

とばかりに平右衛門押し戴きく

「お情けこもるそのお詞。草葉の蔭よりさぞ有難う悦

ぶことゝ存じます。冥加に余る仕合せ」

と財布を香炉の上に着せ

「二番焼香、早野勘平重氏」

と高らかに呼ばはれば